



BALLET DEL TEATRO
LÍRICO NACIONAL

DIRECTORA ARTÍSTICA: MAYA PLISETSKAYA

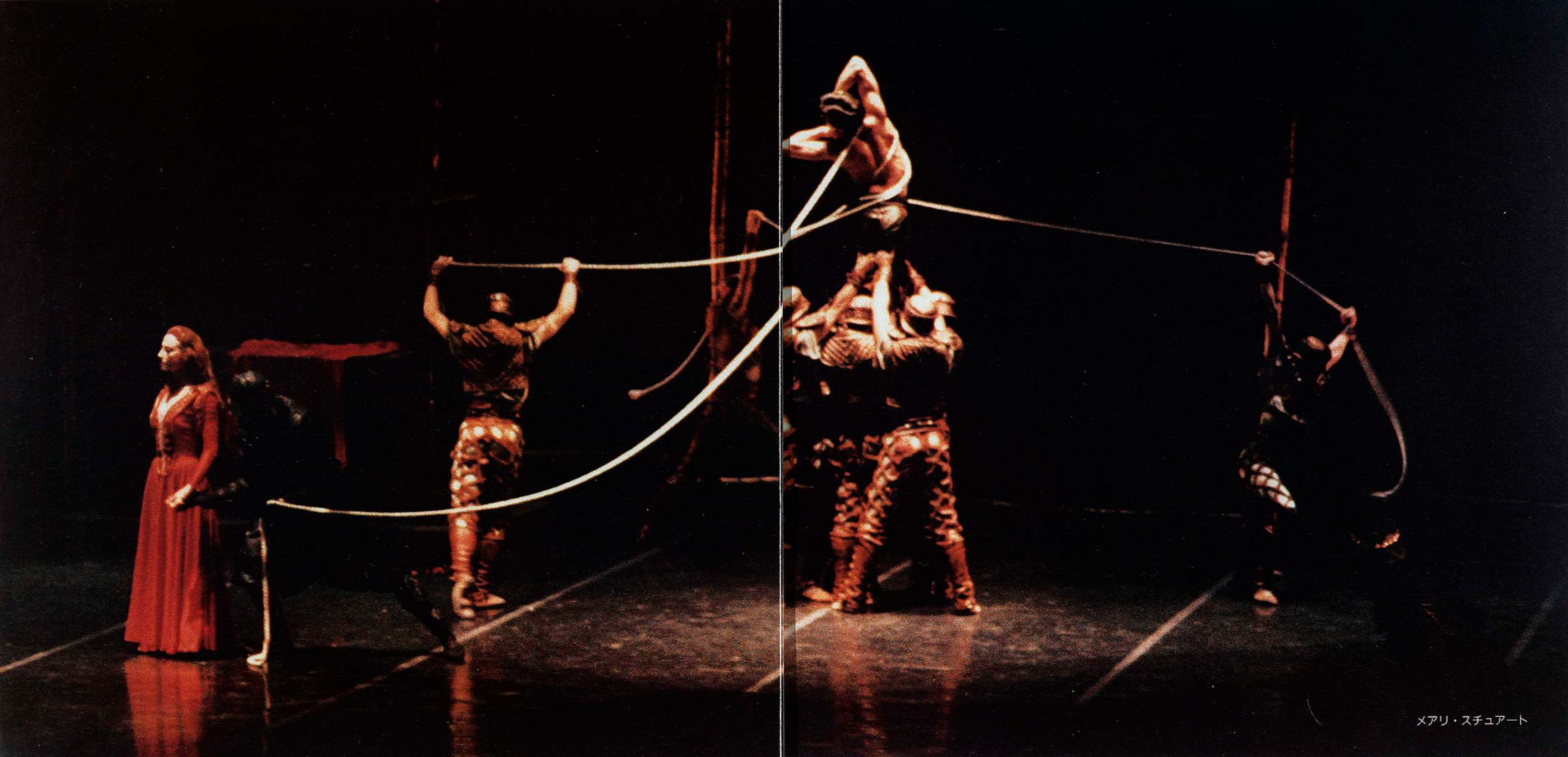
Quene

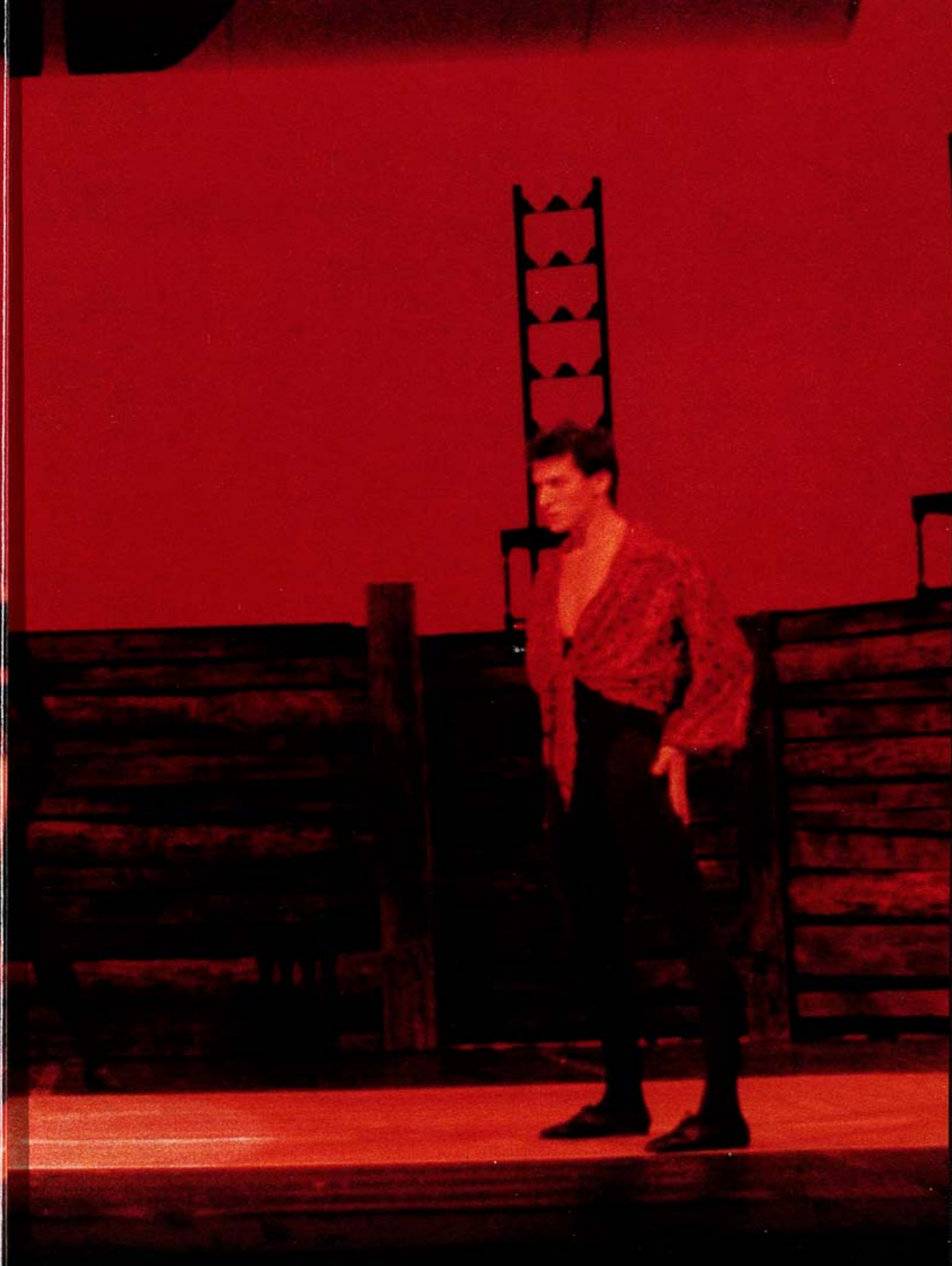




メアリ・スチュアート







カルメン組曲：アランチャ・アルグエリエス





カルメン組曲：マイヤ・プリセツカヤ

シンフォニア・インディア







ダイアナとアクテオン

 **BALLET DEL TEATRO
LÍRICO NACIONAL**
DIRECTORA ARTÍSTICA: MAYA PLISETSKAYA





スペイン国立クラシック・バレエが、高名なプリマ、マイヤ・プリセツカヤの参加をえて、日本国内公演のために、初来日するにあたり、心から歓迎の意を表します。近年、スペイン文化は、しばしば日本に紹介される機会を得、そのレベルも高いものですが、フラメンコという例外はあるものの、(フラメンコはよく知れわたり、来日も繁さで、スペイン人、日本人を問わず、すばらしいダンサーたちの踊りを、常に日本で楽しむことができるような状況です) スペインのバレエは、日本の文化シーンでは、ほとんど無名に近いもののひとつです。

かように豊かな感受性と好奇心で、スペイン文化を知ろうとする意気込みのある当地での、この無名状態に、私は、常々、疑問をいだいておりましたが、幸運なことに、今回、マイヤ・プリセツカヤならびに最高のバレエの創作にたずさわる芸術家たちを迎え、この事態にも終止符がうたれることとなりました。国内各都市で魅力的なプログラムが展開されることと思いますが、日本のバレエ・ファンの皆様はかくもすばらしいものを見るまでに、こんなにも長く待たねばならなかったことに、私と同じ感慨に、ひたられることでしょう。

最後に、労音の皆様、そして今回の公演を実現するためにお骨折りいただいた方々に、感謝の意を表明致します。また、スペイン国立クラシック・バレエ団の団員の方々には心から公演の成功をお祈りし、かつ必ずやそれを達成なさることを確信する旨、申し述べ、私のあいさつとさせていただきます。

1989年3月28日、於：東京

駐日スペイン大使
カミロ・バルシア

Es un gran placer para mí dar la bienvenida a Japón a la primera gira que por este país va a realizar el Ballet Clásico Nacional de España, bajo la ilustre preparación de Maya Plisetskaya. Y lo es porque si bien la presencia de la cultura española es aquí muy frecuente y de gran nivel, con la notable y habitual excepción del flamenco (que tan asiduamente y con tan excelentes intérpretes, tanto españoles como japoneses, se puede disfrutar en los escenarios japoneses), el ballet español es uno de los grandes desconocidos de la escena cultural japonesa.

Y creo que este desconocimiento es injusto en un país que con tanta sensibilidad e interés busca la cultura de España. Por fortuna para todos, aquí está la solución a esa injusticia, de la mano de Maya Plisetskaya y de estos esforzados profesionales del mejor baile. Estoy seguro que, con un programa tan atractivo como el que van a presentar en varias ciudades japonesas, los aficionados al ballet de éste país van a empezar a compartir mi sorpresa por la tardanza con que se va a producir este encuentro.

En todo caso, tengo que hacer constar mi mas sincero agradecimiento a RO-ON y a los patrocinadores de esta gira, por haberla hecho posible. A todos ellos, y a los miembros del Ballet Clásico Nacional Español, mis mejores deseos de un éxito que estoy seguro van a alcanzar.

Tokio, 28 de marzo de 1989

CAMILO BARCIA



マドリッド市 グラン・ビアのカジャオ広場

MAYA PLISETSKAYA BALLET

SCHEDULE OF PERFORMANCES

マイヤ・プリセツカヤとスペイン国立クラシック・バレエ

●公演地	●日程・開演	●会場	●プログラム	●主催
東 京	7[金]6:30	東京文化会館	A	東京労音
東 京	8[土]6:30	東京文化会館	B	東京労音
東 京	9[日]1:30	東京文化会館	C	東京労音
大 阪	10[月]6:30	フェスティバルホール	C	大阪新音
姫 路	11[火]6:30	姫路市文化センター	C	姫路労音
名古屋	12[水]6:30	愛知厚生年金会館	B	中日新聞社／名古屋音楽協会
横 浜	14[金]6:30	神奈川県民ホール	B	ハマ音(横浜音楽鑑賞協会)
東 京	15[土]6:30	パルテノン多摩	A	東京労音
大 宮	18[火]6:30	大宮ソニックシティ	C	東京労音
松 戸	19[水]6:30	聖徳学園川並記念講堂	A	聖徳学園短期大学
東 京	20[木]6:30	昭和女子大学人見記念講堂	A	東京労音
札 幌	23[日]2:00	北海道厚生年金会館	C	北海道新聞社／道新スポーツ／UHB／FM北海道 道新文化事業社／労音・札幌音鑑
仙 台	24[月]6:30	宮城県民会館	C	東北放送／宮城県民会館
水 戸	25[火]6:30	茨城県民文化センター	C	茨城芸術協会



DEL TEATRO LÍRICO NACIONAL

IN JAPAN 1989 ————— 4月・April

1989年／日本公演

●Place	●Date	●Hall	●Program
TOKYO	7 [FRI] 6:30	Tokyo Bunka Kaikan	A
TOKYO	8 [SAT] 6:30	Tokyo Bunka Kaikan	B
TOKYO	9 [SUN] 1:30	Tokyo Bunka Kaikan	C
OSAKA	10 [MON] 6:30	Festivaru Hall	C
HIMEZI	11 [TUE] 6:30	Himezi-shi Bunka Center	C
NAGOYA	12 [WED] 6:30	Aichi Kosei-nenkin Kaikan	B
YOKOHAMA	14 [FRI] 6:30	Kanagawa Kenmin Hall	B
TOKYO	15 [SAT] 6:30	Paruthenon Tama	A
OMIYA	18 [TUE] 6:30	Omiya Sonic-City	C
MATSUDO	19 [WED] 6:30	Seitoku Gakuen Kawanami Kōdō	A
TOKYO	20 [THU] 6:30	Showa-Joshidaigaku Hitomi Kinen Kodo	A
SAPPORO	23 [SUN] 2:00	Hokkaido Kosei-nenkin Kaikan	C
SENDAI	24 [MON] 6:30	Miyagi-kenmin Kaikan	C
MITO	25 [TUE] 6:30	Ibaragi-kenmin Bunka Center	C



マイヤ・プリセツカヤとスペイン国立クラシック・バレエ——1989年日本公演メンバー

芸術監督 マイヤ・プリセツカヤ
製作主任 マリソル・リエラ
支配人 ビクトル・アランダ
常任監督 ライ・バーラ
振付 ホセ・グレリエール・フリエセル
監督助手 マクシモ・バーラ
舞台監督 ゴヨ・ヒメネス
機械技術 マルセロ・スアレス
 ルイス・ガルシーア・カデーナス
電気技術 フロレンシオ・サンチェス
 ルーカス・ゴンサレス
音響技師 ヘスス・サントス
音響助手 ペドロ・A・ハバルト
 衣裳 ローサ・サンチェス
 大道具 ホセ・ルイス・モラ
マッサージ ヘスス・アバディーア
 マテオ・マルティン

舞台監督 森 安文
照明 小沢健夫
照明技術 劇光社
音響 日本中継録音株
衣裳 牛山初江

＜第一舞踊手＞

アランチャ・アルグエリエス
カルメン・モリーナ
リカルド・フランコ
ラウル・ティノ
ハンス・ティーノ

＜ソリスト＞

マルタ・アルバレス
ロサンナ・ロベス
マベル・カブレラ
モンセラート・ガルシア
カルメン・バリス
マリア・ルイサ・ラモス
ソフィア・サンチョ

マヌエル・アルマス
ハビエル・セラノ
ホセ・アントニオ・キロガ

＜バレエ団アーティスト＞

アナベル・アルベロ
デル・マール・パウデソン
ミヤーレ・ボンバルドー
マリア・ルイサ・デルガルド
マリーナ・ドンデリス
マリア・エウローバ・グスマン
アフリカ・グスマン
オリビア・ホルバ
エバ・マリア・ロベス
ベアトリス・マルティン
ベレン・モレーノ
アドリアーナ・サルガート
エステル・オリバ
エバ・マリア・ベレス
スサーナ・ルイス
ヨーコ・タイラ

ホセ・A・ベギリスタイン
ハビエル・カスティージョ
エドゥアルド・カストロ
アントニオ・フェルナンデス
マウリシオ・ゴンサレス
セバスチャン・ゴンサレス
ルイス・マルティン・オヤ
ホセ・マルティネス
フリアン・ミンゲス
ティノ・モラン
フェルナンド・ナバハス
フアン・C・サンタマリア
ホセ・ビセンテ・サレス
オスカル・トラード



MAYA PLISETSKAYA y BALLET DEL TEATRO LÍRICO NACIONAL

Directora Artística: MAYA PLISETSKAYA

Jefe de Producción: MARISOL RIERA

Gerente: VICTOR ARANDA

Director Estable: RAY BARRA

Coreografía: JOSE GRELLER FRIESEL

Ayudante de Dirección: MAXIMO BARRA

Regidor: GOYO GIMÉNEZ

Maquinistas: MARCELO SUÁREZ

LUIS GARCIA CADENAS

Electricistas: FLORENCIO SÁNCHEZ

LUCAS GONZÁLEZ

Técnicos de sonido: JESÚS SANTOS

Ayudantes de sonido: PEDRO A. JABARDO

Sastrería: ROSA SÁNCHEZ

Utilero: JOSÉ LUIS MORA

Masajistas: JESÚS ABADÍA

MATEO MARTÍN

● *Primeras Bailarinas:*

ARANTXA ARGÜELLES

CARMEN MOLINA

RICARDO FRANCO

RAÚL TINO

HANS TINO

● *Solistas:*

MARTA ÁLVAREZ

ROSANA LOPEZ

MABEL CABRERA

MONTSERRAT GARCÍA

CARMEN PARIS

M^a LUISA RAMOS

SOFÍA SANCHO

MANUEL ARMAS

JAVIER SERRANO

JOSÉ ANTONIO QUIROGA

● *Artistas del Ballet*

ANABEL ALVERO

DEL MAR BAUDESSON

MIREIA BOMBARDO

M^a LUISA DELGADO

MARINA DONDERIS

M^a EUROPA GUZMÁN

ÁFRICA GUZMÁN

OLIVIA JORBA

EVA M^a LÓPEZ

BEATRIZ MARTÍN

BELÉN MORENO

ADRIANA SALGADO

ESTHER OLIVA

EVA M^a PÉREZ

SUSANA RUIZ

YOKO TAIRA

JOSÉ A. BEGUIRISTÁIN

JAVIER CASTILLO

EDUARDO CASTRO

ANTONIO FERNÁNDEZ

MAURICIO GONZÁLEZ

SEBASTIÁN GONZÁLES

LUIS MARTÍN OYA

JOSÉ MARTÍNEZ

JULIÁN MÍNGUEZ

TINO MORÁN

FERNANDO NAVAJAS

JUAN C. SANTAMARÍA

JOSÉ VICENTE SALES

ÓSCAR TORRADO

Stage Directors YASUFUMI MORI

Lighting TAKEO OZAWA

GEKIKOSHA

Sound NIPPON CHUKEI ROKUON (K.K.)

Costumer HATSUE USHIYAMA



●プログラム(A)

PROGRAMA



アルバムのページ

音楽: フェリックス・メンデルスゾーン
(無言歌集より、1832年/1845年)

振付: ライ・バーラ

舞台装置・衣裳: パルメリ・ウェジェス・トルカン

初公演: (初演)

ダイアナとアクテオン

音楽: リカルド・ドリーゴ

振付: アグリッピナ・ワガノワ

(マリウス・ブティバのオリジナルの振付による)

舞台美術: ヴァレンティーナ・サヴィーナ / アザリ・プリセツキー

シンフォニア・インディア

音楽: カルロス・チャベス (1936年/インディア交響曲)

振付・衣裳: ナチョ・ドゥアト

舞台装置: ウォルター・トープ

メアリ・スチュアート

音楽: エミリオ・デ・ディエゴ

ビクトル・M・マルティン・ルピオ

振付: ホセ・グラネロ

脚本: フランシスコ・スアレス

舞台装置・衣裳: ウーゴ・デ・アナ

初公開(初演)

HOJA DE ALBUM

Música: F. Mendelssohn. De Romanzas sin palabras (1832-1845)

Dos piezas para piano (1860) y Hoja de Album (1872).

Coreografía: Ray Barra.

Escenografía y figurines: Parmelee Welles Tolkan.

DIANA Y ACTEON, PASO A DOS

Música: Riccardo Drigo.

Coreografía: Agrippina Vaganova

Puesta en Escena: Valentina Savina y Azari Plisetski.

SINFONIA INDIA

Música: Carlos Chavez (Sinfonia India de 1936).

Coreografía y Figurines: Nacho Duato

Escenografía: Walter Nobbe.

MARIA ESTUARDO

Música: Emilio de Diego y Victor M. Martin Rubio

Libro: Francisco Suarez

Coreografía: José Granero

Escenografía y figurines: Hugo de Ana



●プログラム〈B〉

PROGRAMA



セレナーデ

音楽:P.I.チャイコフスキー

振付:ジョージ・バランシン

SERENADE

Música:Peter I. Tchaikovsky.

Coreografía:Georges Balanchine.

ノクターン ~たった一つの誘惑が永遠の輝きをつくりだした~

音楽:アントン・ドヴォルザーク

振付:ライ・バーラ

NOCTURNO ~Tan sólo una seducción hacia el esplendor de la eternidad.~

Música:Anton Dvorak.

Coreografía:Ray Barra.

生命の歌

音楽:グスタフ・マーラー(第5交響曲 嬰八短調より “ロンド”)

振付:アザリ・プリセツキー

舞台装置:ボリス・メッセレル

CANTO VITAL

Música:Gustav Mahler. Rondó de la Quinta Sinfonia en Do sostenido menor, (1901-1902).

Coreografía:Azari Plisetski.

Escenografía:Boris Messerer.

カルメン組曲

音楽:ジョルジュ・ビゼー(オペラ「カルメン」より)

編曲:ロジオン・シCHEDリン(弦楽と47の打楽器のオーケストレーション、自由にアレンジしています。)

振付・演出:アルベルト・アロンソ

舞台装置・衣裳:ボリス・メッセレル

CARMEN SUITE

Música:Georges Bizet. De su ópera. Carmen (1875), adaptade libremente para orquesta de cuerda y 47 instrumentos de percusión por Rodion Schedrin (1967).

Coreografía:Alberto Alonso.

Puesta en Escena:Alberto Alonso.

Escenografía y figurines:Boris Messerer.



●プログラム(C)

PROGRAMA



セレナーデ

音楽:P.I.チャイコフスキー

振付:ジョージ・バランシン

ノクターン ~たった一つの誘惑が永遠の輝きをつくりだした~

音楽:アントン・ドヴォルザーク

振付:ライ・バーラ

生命の歌

音楽:グスタフ・マーラ(第5交響曲 嬰八短調より "ロンド")

振付:アザリ・プリセツキー

舞台装置:ボリス・メッセレル

瀕死の白鳥

音楽:サン＝サーンス

振付:ミハイル・フォーキン

カルメン組曲

音楽:ジョルジュ・ビゼー (オペラ「カルメン」より)

編曲:ロジオン・シCHEDリン(弦楽と47の打楽器のオーケストレーション、自由にアレンジしています。)

振付・演出:アルベルト・アロンソ

舞台装置・衣装:ボリス・メッセレル

SERENADE

Música:Peter I. Tchaikovsky.

Coreografía:Georges Balanchine.

NOCTURNO ~Tan sólo una seducción hacia el esplendor de la eternidad.~

Música:Anton Dvorak.

Coreografía:Ray Barra

CANTO VITAL

Música:Gustav Mahler. Rondó de la Quinta Sinfonia en Do sostenido — menor, (1901-1902).

Coreografía:Azari Plisetski.

Escenografía:Boris Messerer.

LA MUERTE DEL CISNE

Música:Saint Saens.

Coreografía:Michel Fokine

CARMEN SUITE

Música:Georges Bizet. De su ópera Carmen (1875), adaptada libremente para orquesta de cuerda y 47 instrumentos de percusión por Rodion Schedrin (1967).

Coreografía:Alberto Alonso.

Puesta en Escena:Alberto Alonso.

Escenografía y figurines:Boris Messerer.

マイヤ・プリセツカヤの
プロフィール

MAYA PLISETSKAYA



マイヤ・プリセツカヤは、世界のバレエ界で、あの神話となっているアンナ・バーブロワ以来のバレリーナとして認められている。大変エネルギッシュで、その強い個性によって、あらゆる伝統的なバレエ界の風習を打破し、バレエ及び芸術を愛する一般の人々にとって、伝説的な人となっている。

1987年12月に、「スペイン国立クラシック・バレエ団」へ、芸術監督として迎えられて、この未だ若いバレエ団の将来進むべき方向を決めるという重要な仕事に、彼女自身大変喜んで、力を注いでいる。

この素晴らしいロシアのバレリーナは、1925年11月20日に生れた。彼女のファミリーは、劇場やバレエ関係の仕事に就いている人が多かった。世界的に有名な映画俳優ラケル・メッセレルの娘で、スラミーフィとアサーフ・メッセレルは、ボリショイ・バレエ団で30年以上も踊っている有名なバレリーナだが、彼女の姪に当たる。また兄弟のアザリ・プリセツキーは、舞台監督と踊りのマエストロで、現在は「スペイン国立クラシック・バレエ団」で、ワレンティーナ・サーヴィナと共にその仕事をしている。

マイヤ・プリセツカヤが、そのバレエの才能を認められたのは、未だ3才の時で、通っていた幼稚園の庭で自分が思うがままに、自由に踊ったのを見て、その素晴らしさに周囲が驚いた。「生まれながらに自分の才能に気付き、それを自覚した人



は、既にその人生は決定され、それを放棄することはできない。」といわれているが、彼女はその言葉通り、バレリーナとしての道を歩き始めた。

このロシアのプリマドンナは、9才の時、モスクワのバレエ教室に入学した。そこで、エリザヴェータ・ゲルトの指導を受けた。その段階で、もうマイヤ・プリセツカヤは注目され、特別にアサーフ・メッセレルや、レニングラードのキーロフ・バレエ団の偉大な指導者アグリッピナ・ワガーノワと共に仕事をしてきた。

1941年、マイヤ・プリセツカヤはモスクワのボリショイ・バレエ団に入団し、ソリストとして活躍し始めた。わずか数か月後、フォーキンの「瀕死の白鳥」の演技で、一番若い彼女が、その力強い新鮮な踊りで賞を獲得してしまった。アンナ・パヴロワとの比較で、プリセツカヤの演じる白鳥は、手と腕を使っただけの大袈裟な白鳥のはばたきや、自分の存在を目立たせるような派手な動きはしないまでも、生と死におけるあきらめが、大変素晴らしく表現されていた。

この革新的なマイヤ・プリセツカヤのスタイル、即ちその腕の叙情的表現や、表情豊かな才能、動きの統一性等に対して、すぐに多くの人達から、賞讃された。1947年に50回以上の公演を行なった「白鳥の湖」で、オデッタとオディールの二人の人間性を演じることによって、彼女はアーティストとしての名声を獲得した。彼女のように直感力に優れたバレリーナだけが、チャイコフ

スキーの音楽的なすべての色あいを演じることが出来るのである。そして、精神の動揺を抑制することによって、振付けの意味する重要性を印象づけることが出来るのだ。

50年の歳月の中で、マイヤ・プリセツカヤはバレリーナとして高い評価を得て、人気の頂点に立ち多くの役割を演じた。

1954年のラヴロフスキーの「石の花」の銅山の女王役、1958年のモイセーエフの「スパルタクス」のアエジーナ役、しかし、特に3つの大変素晴らしいバレエが、彼女の売り物となった。

1948年、ロスティラフ・ザハーロフの「バフチサライの泉」の中の、嫉妬深く愛情深い愛人ザレマ役、1950年、「ドン・キホーテ」の中の伸び伸びとした才気のあるキトリ役、最後に1956年、バジタング・チャブキアーニ作で同名のバレエの中で演じた、英雄的なラウレーンシャ役、これで彼女の名声は決定的なものとなった。

体の動き、エモーショナルな強さ、芸術性、華麗な素晴らしいテクニックの全てが調和して、この3つの舞台によって彼女は、あらゆる時代に於けるバレエに大きな影響を与え、きわだった貢献をした。

その後も、他のインパクトのある役割を与えられて、舞台を務めてきた。ラヴロフスキーの「ロメオとジュリエット」のジュリエット役、グリゴロヴィッチの「恋物語」のマジナ・ブーヌ役等だが、更に1967年「カルメン組曲」を初演し

て、これは彼女の有名な舞台となった。アルベルト・アロンソの振付け、彼女の夫のロジオン・シCHEDリンが、ビゼーの作品にインスピレーションを得て音楽を担当、このなかで彼女は主役の持つ背徳的な、大胆なキャラクターを的確に表現し強調して見せた。このバレエをポリショイ・バレエ団で初演するという事は、ひとつの大事業で、伝統的なクラシック・バレエに挑戦するということなのだ。振付け以前に、批判を浴び多くの怒りを買うことになったが、それを乗り越え素晴らしい舞台を創りあげたのである。

1972年には、次なる挑戦を企てた。トルストイの「アンナ・カレーニナ」をテーマにしてバレエを踊ろうというものである。シCHEDリンの言葉によると、プリセツカヤはロシアの巨匠によって書かれた作品を、その装置と表情豊かなダンスによって表現しようという思いにとりつかれていた。彼女自身、舞台監督と振付けを担当したが、これは初めてのことであった。こうしてプリセツカヤの「アンナ・カレーニナ」はトルストイが最も苦しめられた女主人公に対する諦めにも似た宿命観を、たいへん感動的な方法で表現した。

70年代になると、プリセツカヤは数々の実験的な活動をはじめ、欧米の振付師とコンタクトをとるようになった。1973年パリで「ばらの死」を初演した。これは、ウィリアム・ブレイクの詩をベースに、ローラン・プティがグスタフ・マーラーの音楽にインスピレーションを得て、彼女のため

に創作したものである。彼女の腕は水草のように波打ち、体は花びらのように広がり、また痛みを感じないかのように縮み、叙情的によりそい、バレエの表現における最高のものとなった。

また、彼女のために考案したモーリス・ベジャールの「イサドラ」の踊りでは、プリセツカヤは舞台の演出に力を注いだ。死にかけたイサドラの出現に驚くダンカン、信じられないようなイメージを演じることとなった。そして、その振付けは、時代の最先端をゆくものと大好評を博した。

マイヤ・プリセツカヤは、「スペイン国立クラシック・バレエ団」について、彼女の経験から、とても若くそして才能のあるこのバレエ団は、きっと人々を魅了するであろうと断言している。「スペインにはクラシック・バレエに対する伝統や人々の礼讃がありませんでした。私にとって興味深いのは、私の経験を活かすことによって「スペイン国立クラシック・バレエ団」が、同時に決定的に進歩して行く跡を見ることができることです。お聞きなさい。このバレエ団は、例外なく大変センセーショナルなショックを人々に与えるでしょう。私がこのバレエ団を去ったあとにも、いまのような情熱を持ち続けるならば、このバレエ団は、彼等独自の道を歩み続けることができるでしょう。ここの踊り手たちと共に私は記録を作りたいのです。このバレエ団が世界に飛び出してゆけるように側面から応援したいのです。」と語っている。



スペイン国立クラシック・バレエ



スペイン国立クラシック・バレエは、アーティスト・ディレクターとして、マイヤ・プリセツカヤを迎え、そのスペイン公演は、スペイン文化のあらゆる分野へ、大変大きなインパクトをあたえた。今世紀の生んだ偉大なバレリーナの一人として、この素晴らしいロシアの踊り手は、スペインのクラシック・バレエ界を、世界的なレベルにまで引き上げた。そのために、ライ・バーラ(舞踊団のディレクター)、ワレンティーナ・サーヴィナやアザリ・プリセツキー(舞踊団の監督とマエストロ)の補佐も大きな力となった。彼女は、まだ創立9年しか経ていない、この若い舞踊団に独特の個性と未来への大きな可能性を与えてくれた。

スペイン国立クラシック・バレエは、スペイン及び国外で多くの公演を行ない高い評価を得ている。また、多くのアーティスト達を招待し、共演している。例えば、世界的に名声のある一流のダンサー達、カルラ・フラッチ、フリオ・ボッカ、シンシア・グレゴリー、フェルナンド・ブホネス、リン・チャールズ、エヴァ・エフドキモワなどである。クラシック、モダンを含めて魅力的なレパートリーを20プログラム以上持っていて、その上、この国の若く優秀なダンサーの多くがこの舞踊団から育っている。

このバレエ団は、もう一つの顔を持っている。それは、オリジナリティーのある振付け、踊りの指導者及びダンサー達の育成にも力を入れていることだ。有名な人達には、グレン・テトリー、ア

ルベルト・メンデス、ミルコ・スパレンブレイク、ナチョ・ドゥアート、パトリシア・ニアリー、カレリア・フェディチェワ、ビセンテ・ネブラーダ、ルク・デ・レイレス、ビクトリア・シモン、サリー・ウィルソン、ジョン・プリンツ、セルジュ・ゴロヴィン、バベル・ボクンなどがいる。このようにスペイン国立クラシック・バレエ団は、二つの目的を果たすべく、努力を重ねている。一つは、クラシック・バレエの分野で多くのスペインの才能を育てるためのバックボーンとなり、もう一つは後世に残る振付けと舞台芸術の素晴らしさを、スペインの人々に紹介するということである。

1979年に、創立されたこの舞踊団は、最初のディレクターとしてビクトル・ウリャテを招いた。彼は、モーリス・ベジャール率いる20世紀バレエ団で踊っていた素晴らしいスペインの踊り手である。そのため初期のこの舞踊団はベジャールの影響を受けて、そのシステムや教育方法を踏襲していた。レパートリーも古いクラシックのナンバーの中から、現代的な感覚をもった作品を取り上げていた。この段階での舞踊団は、若い踊り手達や生徒を育成するために力を注ぎスペイン各地での公演とともに初めて外国へ出てフランスで公演した。

1983年の2月には、新たに大変権威のあるバレエのマエストラ、マリア・デ・アビラをディレクターとして迎えた。彼女はバレエ団内部の仕事

をシステム化し、振付けの重要性を力説して多くの振付け師を招き入れた。最初の振付け師としてスペインでは無名のジョージ・バランシンとアントニー・チューダーを迎え、オリジナルな振付けによる創作作品を演じる事となった。マリア・デ・アビラはもう一人の重要な振付け師、ライ・バーラを招いた。彼はスペインに住んでいるアメリカ人で、踊り手としても振付け家としても有能な人でした。その後彼はこの舞踊団のディレクターの地位にまで上り現在もこの舞踊団のために活躍している。

1987年以来、国外でもフランス、オーストリア、西ドイツ、スイス、キューバ等で公演を行なった。中でもイタリアのベネチアのラ・フェニーチェ劇場やブリュッセルのロイヤル・サーカス劇場等では主演者をその国の踊り手の中から招いて共演し、大好評を得た。また他方国際的なコンクールでも、多くの賞を獲得している。1986年パリのヒジェーの国際コンクールではジェフリー・バレエ団、キューバ国立舞踊団、ヴェネズエラのカラカス国立舞踊団等、国際的に優秀な舞踊団と競い、みごとに金賞を獲得した。

ここ数年はマイヤ・プリセツカヤを芸術監督に迎えスペイン国内の主要都市で公演を行ない大変な反響をよんだ。サラゴサのプリンシパル劇場、マラガのミゲル・デ・セルバンテス劇場、バレンシアのプリンシパル劇場、ヒルバオのアリアガ劇場、アリカンテのノリンシバル劇場、それにムルシアのロメア劇場のオープニング・

ガラ公演ではドナ・ソフィア王女臨席のもとに公演を行なった。最近では、グラナダ、セビリアのイタリカ、メリダの国際フェスティバルに参加、ビゴ、ギジョン、ビトリア、カディス等多くの都市でも公演を行なっている。また、この舞踊団のメンバーはイタリアのレジオ・エミリアで行なわれた「バイラール・エスパーニャ（スペインを踊る）」の夏のフェスティバルにも参加したが、そこでのイタリアの批評を紹介する。「まだ若い舞踊団ながら大変教育されていてフレッシュに感じた。技術的な面からみるとこれから難しい問題に直面するがそれを乗り越える力はあるだろう」（コリエラ・デージャ・セラ紙：マリオ・パシー氏）、「素晴らしいレベルと教育そして全員の質の統一性」（II ジョールナーレ紙：エルザ・アイロルディ女史）

1988年、スペイン国立クラシック・バレエ団は、二つの新しい振付けに挑戦した。ホセ・グラネロの振付けでマイヤ・プリセツカヤとこの舞踊団のための新作「メアリー・スチュアート」、そしてもう一つは「アルバムページ」。これはライ・バーラの振付けによりマイヤ・プリセツカヤが最初に演出する作品である。

スペイン国立クラシック・バレエ団は、スペイン舞踊と共にクラシック、ネオ・クラシック、そしてモダン・バレエまでレパートリーも充実し、今、世界的に注目されている。



常任監督

ライ・バーラ RAY BARRA

父親は北スペイン、ガリシア地方、母は南部セビーリャの出身、本人はサンフランシスコ (USA) で生まれた。同市のバレエ学校、ニューヨークのアメリカン・バレエ・シアターで学んだ後、コペンハーゲンでヴェラ・ウォルコワに師事した。

サンフランシスコ・バレエ、アメリカン・バレエ・シアターを経て、シュトゥットガルト・バレエ団の第1 舞踏手となる。ジョン・クランコ振付けの“ロメオとジュリエット”“エフネギー・オネーギン”“白鳥の湖”“火の鳥”などで主役をつとめた。

66年に事故で踊りを断念し、バレエ・マスター、演出助手として、主にベルリンのオペラ座バレエ団(バランシン他)、フランクフルト・バレエ(ノイマイヤー)で仕事をつづけた。また、初めはオペレッタやオペラ、ミュージカル(キス・ミー・ケイト/ジプシー男爵/マイスター・ジンガー/アイータ等)の踊りの部分から、振付師としての仕事をはじめた。初めてのバレエ創作は、1982年、ミュンヘン・オペラ座での、ラヴェルとラフマニノフの音楽によるもの。

ヨーロッパ各地で活躍しながら、スペインのメノルカ島に住んでいたところ、国立バレエのマリア・デ・アビラの要請を受け、84年から振付けを担当するようになった。85年に助監督、86年に常任監督となって現在に至っている。

バーラ自身はもっとも影響を受けた振付師なクランコであり、他にジェローム・ロビンス、アグネス・デミル、アンソニー・チューダー、ケネス・マクラミン、フレデリック・アシュトンから学んだものが大きいと語っている。



アランチャ・アルグエリエス ARANTXA ARGÜELLES

サラゴサ生れ。4才からサラゴサのスクールにてマリア・デ・アビラ、ローラ・デ・アビラ、クリスチアナ・ミニャナに学ぶ。1981年、アントニオ・カスティリャとサラゴサクラシックバレエ団にてデビュー。同バレエ団のニューヨーク・ジョイスシアター公演ではル・グラン・バ・クラシックを踊る。1984年、スペイン国立古典バレエ団に入団。1985年からプリマ・バレリーナ。1985年ユーロビジョン・ヤングダンサーズ・コンクールにて一位、86年パリ市ダンス・コンクールにて金メダル受賞（ルック・デ・ライレス振付によるアントニオ・カスティリャとのバ・ド・ドウ、ドン・キホーテのバ・ド・ドウ）。1986年、アリシ

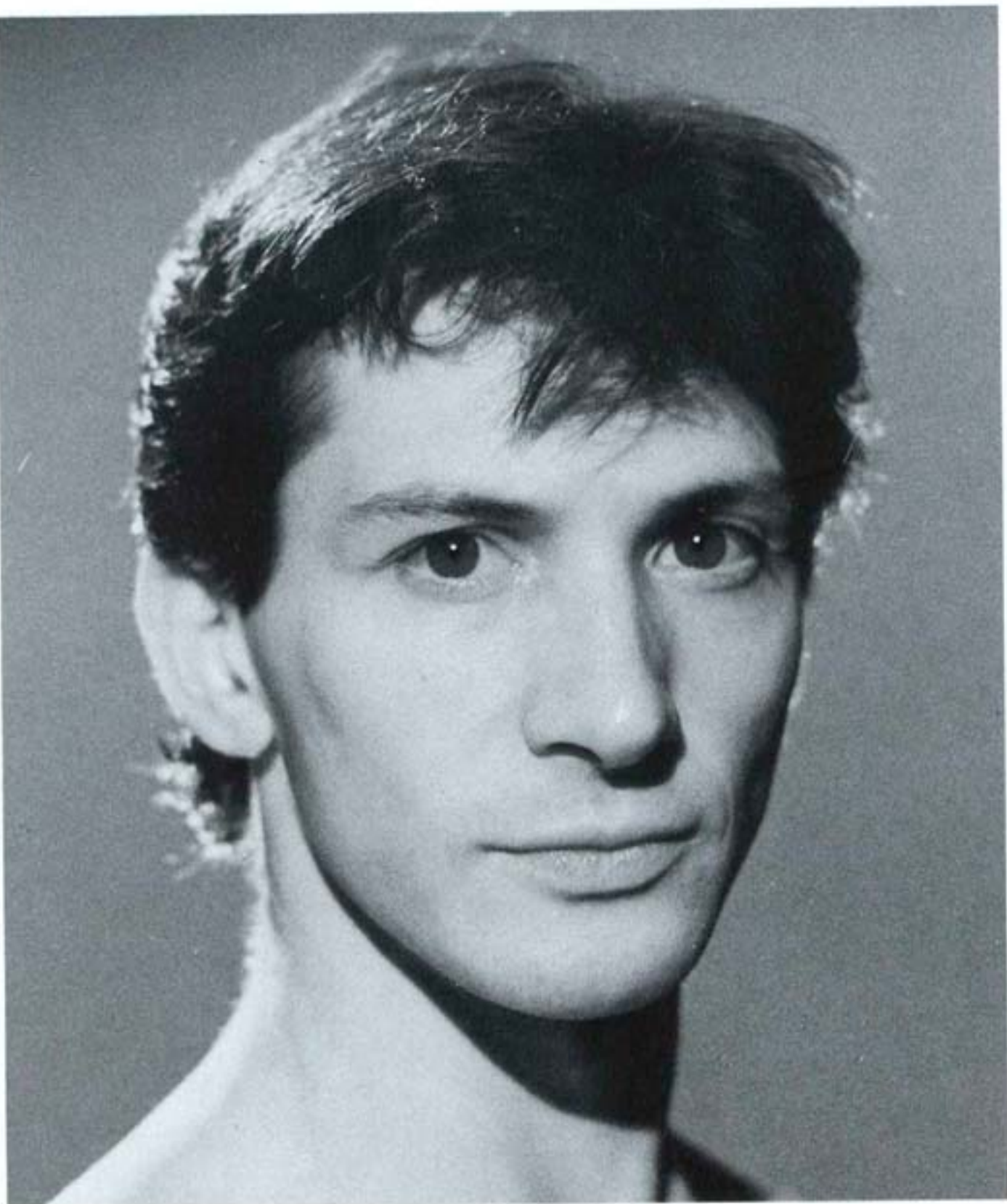
ア・アロンソに招かれハバナ・フェスティバルに参加。1987年7月、キューバ国立バレエ団に招かれラザロ・カレニョと踊る。主要レパートリーとして、セレナーデ、バストラル・シンフォニー、ボロッコ・コンチェルト、レ・シルフィード、インディアン・シンフォニー等。1988年には、ブラッセルのガラ・ファンデーションで、アントニオ・カスティリャとともに参加（ナタリア・マカロワ、アリシア・マカロワ、リチャード・クラガンも参加）、また、オランダのイントロダクションのガラでは、ラウル・ティノとドン・キホーテのバ・ド・ドウを踊る



カルメン・モリーナ CARMEN MOLINA

マドリッド生れ。7才からマドリッド・コンセルバトワールにてアナ・ラゾロの下で勉強を始める。ノラ・カイエ、アントン・ドーリン、ジョン・ギルピン、ルイス・フエンテ、カルミナ・オカニャ、ビクトール・ウリャテ、カルメン・ロチェに学ぶ。ヤング・バレエコンサート及びマドリッド古典現代バレエ団を経て、1979年のスペイン国立古典バレエ団の創設以来の団員。ホルヘ・ドン、ミカエル・ドナール、ビクトール・ウリャテ等とペアを組む。1985年よりプリマバレリーナ。レパートリーとして、ラ・ヴァルス、それが死か？スリー・シーケンス、ボセッション、セレナーデ、リラの園、くるみ割り人形の花の女王、バストラ

ルシンフォニー、グラン・バ・ド・カトル、白鳥の湖のオデット、レ・シルフィード、テーマとヴァリエーション、ドン・キホーテのバ・ド・ドウ、海賊。1987年のヴェネチア・フェニーチェ劇場100年祭ガラでは、リカルド・フランコとくるみ割り人形のグラン・バ・ド・ドウを踊る。



リカルド・フランコ RICARDO FRANCO

マドリッド生れ。3才よりアラゴン地方フォルクロレ・ダンス・グループで踊る。1977年、ルイス・フエンテにつきバレエを始める。1979年ピクトール・ウリャテ率いるスペイン国立古典バレエ団入りし、数か月後ソリストとなる。ラ・ヴァルス、それが死か？ 火の鳥を踊る。ピクトール・ウリャテ、マルミナ・オカニャ、カルメン・ロチェと研鑽を積む。1981年、奨学金を得てニューヨーク・ジョフレイ・バレエ・スクールにて、エクトール・ザラスベ、スラミス・メセレ、ロバート・デンヴァー、マッギー・ブラック、メレディス・ベイリス、デイヴィッド・ハワードに学ぶ。アメリカン・バレエシアター、ニューヨーク・シ

ティ・バレエ、ジョフレイ・バレエ団のガラ公演にソリストとして参加。アンヌ・マリー・アンヘロ、ルク・デ・レレスと踊り、最近ものは、「キチョと素晴らしい顔役」。1985年よりプリマダンサー。「白鳥の湖」第二幕、ジークフリード役をエヴァ・エフドキモワと、87-88年には、レ・シルフィードをカルラ・フラッチとスペイン国立歌劇場で踊る。レパトリーには、セレナーデ、リラの庭、パストラルシンフォニー、くるみ割り人形、テーマとヴァリエーション、インディアン・シンフォニー等。1987年、ベニス・カーニバルのグラン・ガラに招待される。



ラウル・ティノ RAÚL TINO

マドリッド生れ。14才よりフリャ・エステベスにつきバレエを始め、後ルイス・フエンテに学ぶ。1979年スペイン国立古典バレエ団の奨学金を得、後に同バレエ団入りする。1983年からソリスト、1985年からプリマダンサー。サンタンデル、グラナダ、マドリッド、ハバナの国際フェスティバルに参加。1984年、バルセロナ・ダンスキンフェスティバルにトリニダッド・セビリャノとともに活躍。1987年ベネズエラ国立バレエ団に招待され、マリア・アレハンドラ・トスタと「ロメオとジュリエット」を踊る。また、同バレエ団とは、フランス国内公演をしている。レパトリーとしては、火の鳥、セレナーデ、パロオコ・コンチェ

ルト、リラの庭、6人のためのバーカッション、パストラル・シンフォニー、くるみ割り人形、テーマとヴァリエーション、「海賊」のバ・ド・ドウ、チャイコフスキーのバ・ド・ドウ、ドン・キホーテについては、リン・チャールズ、エヴァ・エドキモワと踊っている。1988年、オランダのイントロダクションのガラでは、アランチャ・アルグエリエスとドン・キホーテのバ・ド・ドウを踊る。



ハンス・ティノ HANS TINO

ハンス・ティノはドイツのゼリゲスターに生れたが、幼少の頃スペインへ移住した。そこで17歳の時、フリャ・エステベスとルイス・フェンテの指導により踊りの勉強を始めた。1979年にマドリードのスペイン国立クラシックバレエ団の奨学金を獲得し、そこで、カルミーナ・オカーニャ、カルメン・ロチャ、セルジュ・ゴロヴィン、マリア・フェイ・ビクトル・ウジャータ等の指導を受け、1980年にこのバレエ団に入団した。

1983年にはソリストに昇格し、キューバのハバナや、スペインのサンタンデール、グラナダの国際フェスティバルにも出演しました。

彼の出演した作品は「遊ぶ鳥」「セレナーデ」「6

人の男達のための打楽器」「義勇軍達」等で、またトップの踊り手として「リラの園」「田園交響曲」

1987年ムルシア、バルセロナ、サラゴサ等のガラ・コンサートで、マリア・アルバレスと共に、「ノクターン」に出演した。





マルタ・アルバレス MARTA ÁLVAREZ

レオン生れ、同地にて8才からダンスを勉強、コンセルバトワール・オブ・マドリッドに入学しアナ・ラザロのもとで研鑽をつむ。1983年、バルセロナ・ダンスキン・コンクールに招待され「白鳥の湖」第二幕バ・ド・ドゥを踊る。また、ブラジルのブラジリア、アレシフェでは、レ・シルフィード、眠れる森の美女、白鳥の湖で、バ・ド・ドゥ、グラン・バ・ド・カトルを踊る。コンセルバトワール終了後、1984年、トレラベガ・バレエ団入り、1985年、スペイン国立古典バレエ団入り。「白鳥の湖」(大白鳥のバ・ド・カトル、バ・ド・ドゥ、くるみ割り人形、ノクターンを踊る。1987年よりソリストとなりハンス・ティノと

共に、「ノクターン」をムルシア、サラゴサ、バルセロナのガラで踊る。



ロサンナ・ロベス ROSANNA LOPEZ

サラゴサ生れ。マドリッドにて、カレン・フアナ・タフト、カルミナ・オカニャとともに研鑽を開始、ライフ・オルンベルグとはブルノンビル・スタイルにつき研究。1977年、マドリッド王室バレエ団にてデビュー。1978年、ルイス・フエンテ・バレエ団に入団。同年、ホセ・グラネロ等のバレエ団と定期的に共演。1979年、ロンドンに移りカレン・ベル・カナーとともにマーサ・グラハムのテクニクを勉強し、後にマドリッドにてカール・パリスとともに磨きをかける。1980年一年間の奨学金を得てモーリス・ベジャール20世紀バレエ団のムドラ・スクールにて、古典、ジャズ、表現法をカルメン・ロチュエ、ジャック・ソサン、ミ

ーシャ・ヴァン・ホーケ等に学ぶ。

1982年帰国直後スペイン国立古典バレエ団に入る。1985年よりソリスト。バストラル・シンフォニー、インディアン・シンフォニー、「白鳥の湖」の大白鳥等のソリスト。



マベル・カブレラ MABEL CABRERA

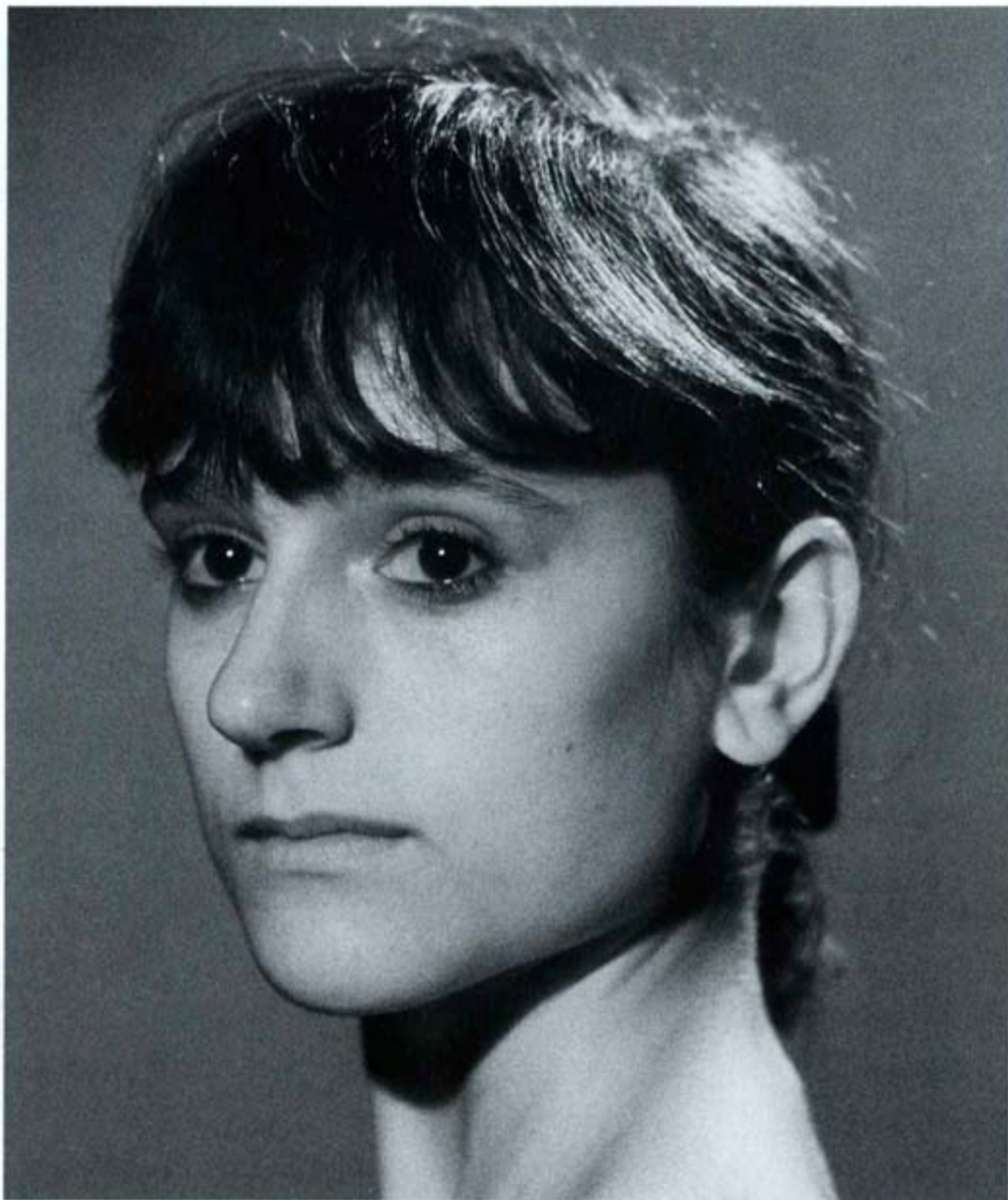
ラス・パルマス・デ・グラン・カナリア生れ。同地にて、ヘル・バルブにつき研鑽。ラス・パルマス現代バレエ団団員となる。1979年奨学金を得てバルセロナにてラモン・ソレにつき研鑽後、ラモン・ソレ・バレエ団に入団。同時にバーバラ・カスプロヴィック、エステバン・ブルナにつきバルセロナ・シアター・バレエ学校にて研鑽。スペイン国立バレエ学校では、カルミナ・オカニャ、カルメン・ロチェにつき研鑽。マドリッド王立高等音楽バレエ学校にて最終研鑽。後に、バリ、ジェノバにてイヴェット・ショヴィレ、ホルヘ・ガルシア、ジェラルド・ウイルク等と活動。1982年、エヴァ・ボルグ率いるバリ・ヴェルサイユ・バレ

エと活動。1983年、スペイン国立古典バレエ団に入る。1987年よりソリスト。リラの園、白鳥の湖、テーマとヴァリエーション、インディアン・シンフォニー等のソリストを務める。



モンセラート・ガルシア MONTSERRAT GARCÍA

マドリッド生れ。ブルノンビル・スクールにてライフ・オルンベルグにつき10才よりバレエを習う。後に、カレン・フアナ・タフト、カルミナ・オカニャ、カルメン・ロチェ、ホセ・ルラネロと学ぶ。「バレエ・シルエット」をルイ・フエンテ・バレエ団と共演。1981年スペイン国立古典バレエ団に入団、「火の鳥」「トラヴェルセ(渡航)」を踊る。1985年よりソリスト。コンチェルト・バロック、「白鳥の湖」の大白鳥等のソリスト。



カルメン・パリス CARMEN PARIS



マリア・ルイサ・ラモス M^a LUISA RAMOS

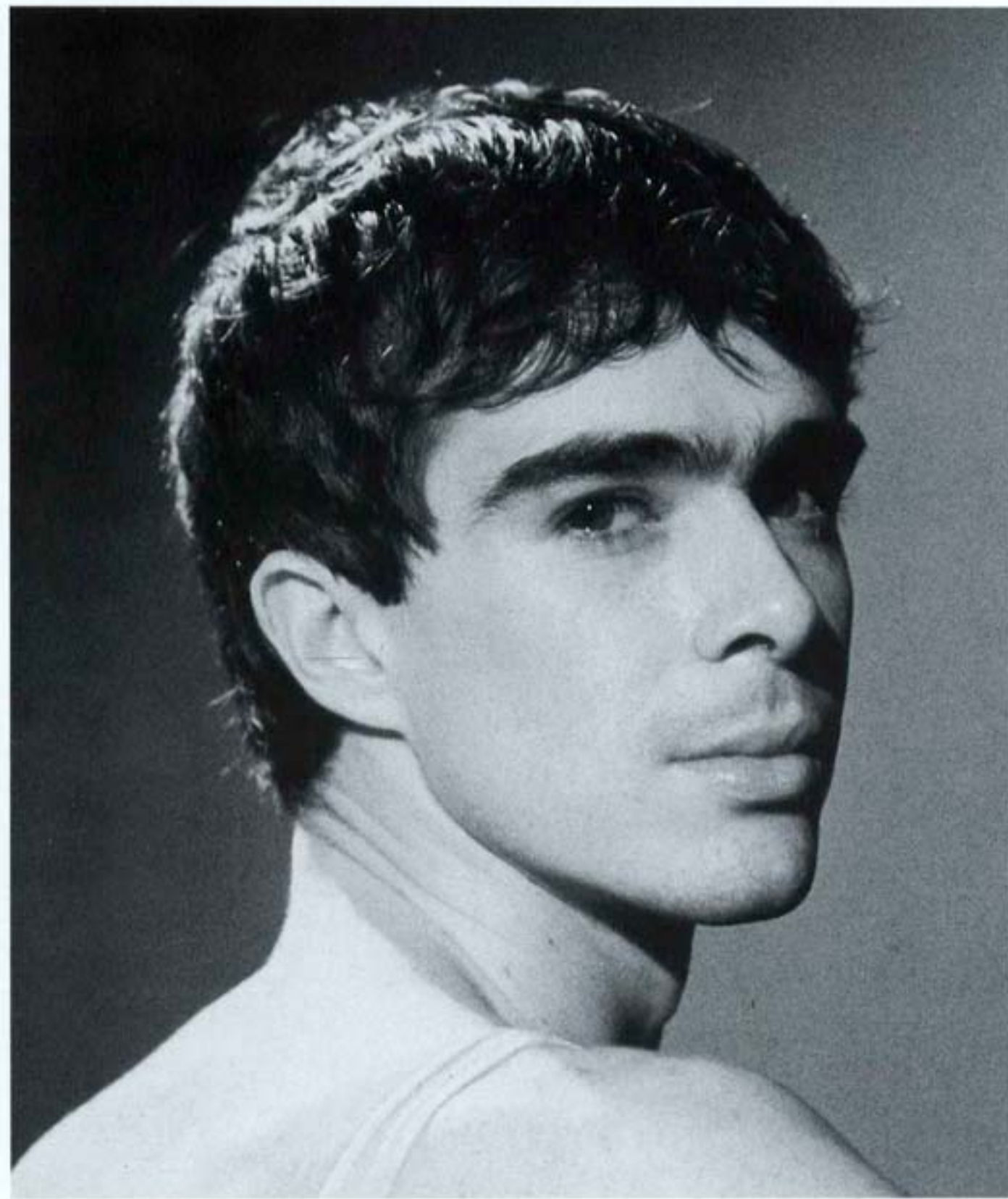
マドリッド生れ。4才からアフリカ・グスマン、後にカレン・タフトにつき研鑽。1978年マドリッド王立高等音楽バレエ学校終了。同年、ドイツ・ケルン振付けコンクールに参加。後、ニューヨークのアメリカン・バレエ・シアター、ワレンチナ・ブレイスラス・ラヴェックにクラシック・ダンスを学ぶ。1977-78年、ロンドン・ダンス・センターにてジョン・オブライエン、アンナ・ナルコットとともにクラシックおよびモダンダンスを学ぶ。1981年、カルミナ・オカニャ、ローラ・デ・アビラ、カルメン・ローチェのスペイン国立古典バレエ団に入団。1986年からソリスト。レパートリーとしてパストラル・シンフォニー、カンタータ51、インディアン・シンフォニー、レ・シルフィード等。



ソフィア・サンチョ SOFÍA SANCHO

マドリッド生れ。5才からマドリッド・コンセルヴァトワールにて研鑽を開始。アナ・ラザロ、ノラ・カーイエ、ピクトール・ウリャテ、アントン・ドリンに学ぶ。73-79年、アナ・ラザロのヤング・バレエ・コンサート及びルイス・フエンテ・バレエ団に参加。73年、ロンドン・ダンス・センターにてジョン・オブライエン、マリア・フエイについて研鑽。3年後、ニューヨークに移り、アメリカン・バレエ・スクールにて研鑽。1979年、スペイン国立古典バレエ団に入団。1980年からソリスト。ミカエル・ドナール、ホルヘ・ドンと、「それが死か?」「カンタータ51」「火の鳥」を踊る。ミーシャ・ヴァン・ホーケのバ・ドゥ・トロ

ワ、オリヴィエ・ベリゲ振付の「真夏の夜の夢」等を踊る。1981年、トーレラベガ・バレエ団ではレ・シルフィードのバ・ド・ドゥを踊る。



マヌエル・アルマス MANUEL ARMAS

マヌエル・アルマスは、カナリア諸島ラ・ゴメーラ島のサン・セバスティアンに生れた。18才の時ルーマニア人のヘル・バルブ氏に師事し、ラス・バルマスでバレエのレッスンを始めた。その後、タラゴナのインター・ナショナル・ダンス・スクールで、セルジュ・ゴロビーネやロセリャ・ハイタワー氏のレッスンを受け、1983年バルセロナの劇場の招待により、バルセロナの劇場に移った。そこで、バルバラ・カスプロビック、エステバン・ブルナー、ギジェルミーナ・ゴルの指揮のもと、ラモン・ソレのクラスをうけてクラシックとモダンにわたって、自己のスタイルを確立した。

1985年2月には、スペイン国立クラシックバレエ団に入団、団員として活動を始め、1988年の4月にはソリストに昇進した。彼の出演作品は、「神の詩」「義勇軍達」「6人の男達のための打楽器」「インド交響曲」「ライモンダ・ディベルティメント」「主題とバリエーション」「4つの気質」。

そして現在もカレリア・フィエディチーバ、バベル・ボクン、ジョン・プリンツ、マリア・ファイ等のクラスで研究を重ねている。



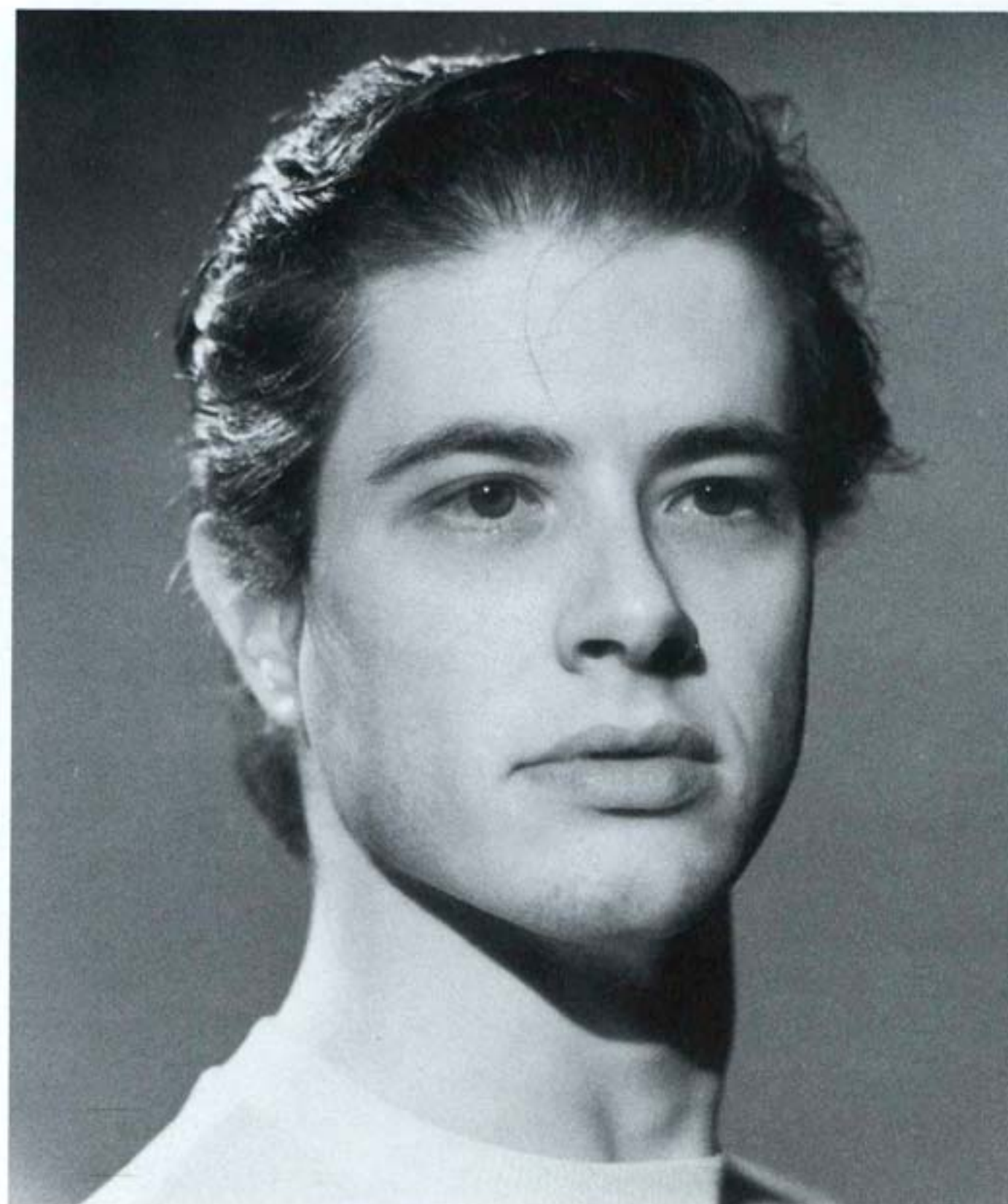
ハビエル・セラーノ JAVIER SERRANO

サン・セバスティアンに生れ、10才の時から、ベーター・ブラウン、アゲダ・サラサの指導のもと、同市の音楽院で踊りの勉強を始めた。5年後にはスペイン国立クラシックバレエの教室に入り、そこで、カルメン・ローチャ、カルミーナ・オカーニャ、ローラ・デ・アビラ、カルル・パリス等の指導を受けた後、サラゴサのクラシック・バレエ教室で、クリスティーナ・ミニャーナ女史のもとで自己のスタイルを確立するため勉強した。そこでは、トリニダー・セビジャーノとアランサ・アルゲージェスのコンビとも一諾だった。

1985年スペイン国立クラシックバレエ団に正式に団員として入団、そこで出演した作品をあげて

みると「義勇軍達」「6人の男達のための打楽器」「田園交響曲」「神の詩」「くるみ割り人形」「夜明け」等です。その上に「ライモンダ・ディベルティメント」「インド交響曲」「主題とバリエーション」「4つの気質」等にも出演した。

1987年3月、イタリアのヴェネチアのラ・フェニーチェ劇場のガラ・コンサートに出演、帰国後、ソリストに昇進した。彼の指導者達にはカレリア・フェディチエーバ、ジョン・プリンツ、マリア・ファイ、カレミア・モレーノ等がいる。



ホセ・アントニオ・キロガ JOSÉ ANTONIO QUIROGA

ホセ・アントニオ・キロガはセビリア生れで、18才の時、マリア・ルイサ・リーバスの指導のもとにクラシックバレエの勉強を始めたが、1年後にはマドリッドのスペイン国立クラシックバレエ団の教室に入学した。

その後、このバレエ団の団員として入団、カルメン・ローチャ、カルミーナ・オカーニャ、ビクトル・ウジャータ、ルイス・フェンテ、エクトル・サラスベ、カレミア・モレーノ、ジョン・プリンツ・バベル・ボクン、それにロセーリャ・ハイタワー等の指導を受けた。

1987年にソリストに昇進、出演作品は「ライモンダ・ディベルティメント」「待望」「主題とバリエーション」「4つの気質」「ワルブルギスの夜」等がある。1987年にはイタリアのヴェネチアのラ・フェニーチェ劇場のガラ・コンサートにもソリストとして出演した。

エーション」「4つの気質」「ワルブルギスの夜」等がある。1987年にはイタリアのヴェネチアのラ・フェニーチェ劇場のガラ・コンサートにもソリストとして出演した。



《バレエ団アーティスト》

アナベル・アルベロ
ANABEL ALVERO

マール・パウデソン
MAR BAUDESSON

ミレーヤ・ボンバルドー
MIREIA BOMBARDO

マリア・ルイサ・デルガード
M^a LUISA DELGADO

マリーナ・ドンデリス
MARINA DONDERIS

マリア・エウローバ・グスマン
M^a EUROPA GUZMAN

アフリカ・グスマン
AFRICA GUZMAN

オリビア・ホルバ
OLIVIA JORBA

エバ・マリア・ロベス
EVA M^a LOPEZ

ベアトリス・マルティン
BEATRIZ MARTIN

ベレン・モレーノ
BELEN MORENO

アドリアーナ・サルガート
ADRIANA SALGADO

エステル・オリバ
ESTHER OLIVA

エバ・マリア・ペレス
EVA M^a PEREZ

スサーナ・ルイス
SUSAN RUIZ

ヨーコ・タイラ
YOKO TAIRA

ホセ・A・ベギリスタイン
JOSE A BEGUIRISTAIN

ハビエル・カスティージョ
JAVIER CASTILLO

エド アルド・カストロ
EDUARDO CASTRO

アントニオ・フェルナンデス
ANTONIO FERNANDEZ

マウリシオ・ゴンサレス
MAURICIO GONZALEZ

セバスチャン・ゴンサレス
SEBASTIAN GONZALES

ルイス・マルティン・オヤ
LUIS MARTIN OYA

ホセ・マルティネス
JOSE MARTINEZ

フリアン・ミンゲス
JULIAN MINGUEZ

ティノ・モラン
TINO MORAN

フェルナンド・ナバハス
FERNANDO NAVAJAS

ファン・C・サンタマリア
JUAN C SANTAMARIA

ホセ・ビセンテ・サレス
JOSE VICENTE SALES

オスカル・トラード
OSCAR TORRADO





ダイアナとアクテオン



アルバムのページ

音楽：フェリックス・メンデルスゾーン

振付：ライ・バーラ

舞台装置・衣裳：バルメリ・ウェジェス・トルカン

初公開(初演)

「アルバムのページ」は、かつてアメリカでダンサーとして活躍したライ・バーラの新しい振付け作品であり、またバーラが終身監督として主宰する「バレエ・デル・テアトロ・リリコ」バレエ団のために、「ラ・エスペーラ」(希望)(1987)、「くるみ割り人形」(1986)、「ノクターン」(1985)、「ボエマ・ディビーノ」(1985)に続く第5作目として、特に振付けられたものである。

バレエ「アルバムのページ——モーメント一連——」を創作するにあたり、バーラは、フェリックス・メンデルスゾーンの音楽、具体的には1832年から1845年にかけて作曲された「無言歌」の中の6曲、「ピアノのための2つの作品」(1860)、そして「アルバムのページ断章」(1872)からインスピレーションを受けた。できあがった作品は、このドイツ人の作曲家の手になる小品のもつ強靱さと叙情性を巧みに表現する踊りとなった。バーラは次のように語る。「メンデルスゾーンのピアノ曲には、昔から魅かれるところがありました。私の他の作品のどれと比べてみても、この踊りほど音楽の影響を強く受けたものはありません。動きのひとつひとつ、そして創作の全過程において、音楽が力を発揮しました。いろいろなアイデアとか、ある程度固まったイメージはあったので、それに合う曲を捜しました。そして、この(メンデルスゾーンの)音楽に出会ったのですが、やがて音楽自体の存在がふくらみ、ついにはバレエそのものをも変えてしまいました。」

ライ・バーラが振付けたこの作品は、9つの曲を使っている。一つめは、「無言歌、op.53、No.1」(アンダンテ・コン・モト)。4つのグループと一組のカップルが、薄明かりの中で静止している。やがて音楽が鳴り響き、最初の「モーメント」が始まる。女性ソリスト5人によるパ・ド・サンク。そのうちの一人が主役であるが、彼女たちが語り合う場面である。「Zwei Klavierstücke」のアンダンテ・カンタービレの第一楽章にのって、落ちついて円熟した様子をただよわせた一組のカップルが登場する。静けさと穏やかさの中で展開される、抑制のきいた、それでいて豊かで満ち足りたパ・ド・ドウ。「いにしえの恋」への追慕である。その後、全体を通して最も緊迫した場面に移る。曲は「Venetianische Gondollied」(アレグレット・トランキーロ、op.30、No.6)。二人の女性の間で逡巡する一人の男性の姿をパ・ド・トロワで表現する。

次の場面は、前の場面よりはゆったりとしているものの、やはり論争のモチーフに基づいた「Jägerlied (狩りの歌) op.19、No.3」(モルト・アレグロ・エ・ビバーチェ)を使っている。主役の二人に少しの間、合流するもう一組のカップル。これはバーラの説明によると、「微笑の精」を暗示しているのだという。

その次の「モーメント」は、舞踊「アルバムのページ」におけるふたつめのパ・ド・トロワである。「アンダンテ・エクスプレシーボ、op.85、No.1」

のメロディーをバックに、男一人、女二人の計三人が非常に均衡のとれた動きをみせる。友情と親しみがあれば、いかなる邪悪な感情をも退けてしまうと言っても言いたげに。

この後のパ・ド・ドウは、一人の男性が愛する人に別れを告げるというポーズで終わる。女性のメランコリーと無言の悲しみを表わすかのように「Venetianische Gondollied」 op.62、No.5」(アンダンテ・コン・モト)が奏でられる。このひそやかな断音とあざやかな対比をなすのが、エネルギッシュで力強い次のパ・ド・トロワである。のどかな田園を舞台に、5人の踊り手たちが、くつろいで楽しげな様子で主役と語り合っている。この雰囲気は、この舞踊のタイトルともなっている「アルバムのページ、op.117」(アレグロ)の真髓を最もよく反映している。やがて3組のカップルが次の「ページ」を踊る。第2場でも表現した純粋な愛を捧げようとする無垢な者たちの姿を描くロマンチックな場面である。曲は8番目の「アンダンテ・エクスプレシーボ」。そしてフィナーレへと移行してゆく。

フィナーレは「アンダンテ・コン・モト op.38、No.65」。この曲をバックに、一番最初の情景をもう一度繰り返して、舞踊「アルバムのページ」は終わる。

ダイアナとアクテオン

音楽：リカルド・ドリーゴ

振付：アグリッピナ・ワガノワ

(マリウス・ブティバのオリジナルの振付による)

このバ・ド・ドゥは、しばしば「エスメラルダ」とも称されるが、それはこの踊りが大作「エスメラルダ」の一部だからである。「エスメラルダ」は1844年ロンドンで初演された。振付者は「ジゼル」で有名なジュール・ペローである。このバレエはのちに露都ペテルブルグにもたらされファニー・エルスラー、カルロッタ・グリジなどロマンティック・バレエを代表する舞姫たちによって踊られ、人気バレエとしてロシアに定着した。そして1886年、ロシア・バレエの父マリウス・ブティバによる1886年の改訂演出の際に、表記のバ・ド・ドゥが導入された如くである。月の女神ダイアナと、森の狩人アクテオン（アクタイオン）のエピソードを描いたものだが、バレエを構成する「ノートルダム・ド・パリ」の物語とは何の関係もないので、恐らくは第二幕第二場、婚約式の場面に余興として踊られたのではないかとと思われる。尚、現在残る振り付けは、1935年の、アグリッピナ、ワガノワの改訂上演のときのものである。



シンフォニア・インディア

音楽 カルロス・チャベス (インディア交響曲)

振付・衣裳 ナチョ・ドゥアト

舞台装置 ウォルター・トーフ

初演 ネーデルランド・ダンス・シアター、
1984年シェヴェニンゲン (オランダ)

スペインのバレンシアに生まれた舞踊家ナチョ・ドゥアトの作品で、彼の師であるイリ・キリアンなどの現代舞踊家の影響が感じられるが、十分に個性的な、円熟した作品である。

メキシコの代表的作曲家チャベスの交響曲(1935)により、10組の舞踊手によって表現される。





ホセ・グラネロ JOSE GRANERO

ホセ・グラネーロは、アルゼンチンのブエノス・アイレスに生まれた。幼少の頃からブエノス・アイレスのコロン劇場のクラスでクラシック・バレエの練習を始め、そこでバレエとオペラの最初の舞台を踏んだ。17才の時、自分のスタイルを確立するためにアメリカへ渡り、バレエ・リュス・ド・モンテカルロ、バレエ・シアター、ニューヨーク・シティ・バレエ等のクラスへ入って練習を積み、その後、ハンニャ・ホルムについてモダン・バレエのレッスンを受けた。バッシュカー舞踊団でインド舞踊をも研究するようになった。

同じ頃、スペイン舞踊にも興味を示し、ヒメネス&バルガス舞踊団に踊り手として入団、この舞踊団で世界各地に公演旅行に出かけ、長い間ダンサーとして輝かしい時代を過ごした。50才の時、スペイン舞踊をさらに広い分野にわたって研究するためにスペインに渡った彼は、それを機にスペイン永住を決心し、ビラール・ロペス、マリエンマ、ルイシージョ等の舞踊団のトップ・ダンサーとして契約を結んだ。

しかし、振付けと創作の仕事がふえ、ダンサーとしての道は放棄せざるをえない状況となり、踊り手たちの教育と振付けに専念するようになり、同時に、映画、テレビ、サルスエラ（スペインの民族オペラ）、それにオペラの分野での仕事も数多くしてきた。

その後、振付師としてスペイン国立バレエ・フェスティバルのマスターになり、マドリッドのスペイン国立バレエ団の理事にも就任して、スペイン舞踊の中に新たな美学と情熱を吹き込むリーダーの一人として活躍してきた。彼の創作したナンバーの中で特に印象に残る作品に、「ドン・ファン」（アントニオ・ガテス舞踊団公演）、「フリア」（ギリシャ神話の報復の女神を題材にしたもの）、「ベテネーラと南」（アンダルシア地方の民謡を題材にしたもの）、「苦悩の対話」、「アルベニスへの讃歌」（アルベニスはスペインを代表する音楽家）、「道化の夜明け」等がある。

今回、スペイン国立クラシック・バレエ団のディレクターとして迎えられたロシアのマイヤ・ブリセツカヤに請われて、彼女とこの舞踊団のために新たに創作した作品、それが「メアリ・スチュアート」である。



メアリ・スチュアート

音楽（作曲・翻訳・創作）：

エミリオ・デ・ディエゴ

ビクトル・M・マルティン・ルピオ

振付：ホセ・グラネロ

脚本：フランシス・スアレス

舞台装置・衣裳：ウーゴ・デ・アナ

「メアリ・スチュアート」は、ホセ・グラネロが特にスペイン国立クラシック・バレエ団のために構想を練った最初の振付けものであり、同バレエ団の芸術監督となって以来のマイヤ・プリセツカヤの労苦の一面を示す良い見本ともなる作品である。スコットランドの女王に以前から惹かれていたプリセツカヤの願いに応え、グラネロ（「メディア」、「ボレロ」等バレエの作者）は、エミリオ・デ・ディエゴ（ヴィクトール・マルティン・ルピオ共作）の音楽とウーゴ・デ・アナの美術を基に構想し、女王の人間像を描いた創作作品である。グラネロは、歴史上のこの謎めいた人物メアリ・スチュアートの波乱にみちた晩年を約60分にわたり、素晴らしい原作のもつ効果と激しさを彼の作劇法を用いて、いかんなく再現している。

スコットランドへ帰国の迫ったフランス滞在のスコットランド女王メアリ・スチュアートの晩年（1561年）を、マイヤ・プリセツカヤがスコットランド女王の存在感をもって、まさに女王そのものに変身して演じきっている。最初の夫、フランス王フランシスの急死に始まるメアリ・スチュアートの人生の決定的な瞬間の一つ一つを、舞台上で間断なく表現している。どんよりとした空気のスコットランドの宮廷に、3年ぶりにメアリ



・スチュアートが戻ってくる。メアリの信奉するカトリックと対立するカルヴァン教徒のリーダー、ジョン・ノックスらとは、黙殺、激しく対立するようになる。彼女の腹心の秘書デヴィッド・リッジオは、彼女の目の前で殺害され、この暗殺の犯人、魅惑的な策謀家ダーンリー伯爵は、彼女の2番目の夫になる。彼は、自分の妻の策謀により残酷とは言えないまでも苦しみながら不可思議な死をとげる。これらの劇的な出来事は、ボスウエル伯爵とは無関係ではない。ボスウエル伯爵は、メアリの愛人で、恐らくはダーンリー伯爵殺害の共謀者だからである。この後、ボスウエル伯爵も流刑になり、メアリから遠ざかり、その死は、ますますメアリの良心を稀薄なものにしていく。

緊張感はますます高まり、イサベル女王の出現で最高潮に達する。それはメアリ・スチュアートが持つ悲劇的運命の決定的な象徴でもある。

ついにイサベル女王の裁断により、メアリ・スチュアートは1587年2月8日、フォザリングейの城内で断首されこの世を終える。マイヤ・プリセツカヤは、この最後を信じられないような「夢」の舞いで飾る。

基本を史実に置きながらも、グラネロは、より想像的なものを振付けに与え、主人公の「複雑性」

と周囲の人物の「曖昧性」に意を注ごうとしている。「疑惑」の雰囲気を出すために、ダンサーを二群に分け、「脅迫」と「慰め」がかわるがわる出現するが、いずれの場合も、その時その時の主人公が舞台を分担できるようになっている。メアリの宮廷の4人の侍女は、曖昧な態度と天上人の様相を持つが、決定的瞬間においてはマクベスの魔女とも重ね合わせることができる。また、男性群が執拗に登場し、フランスの兵士や企み一杯のスコットランド貴族達を表わしている。また彼らは、常に各々の方法で「刺客」を表わすとともに、数多くの罪に彩られたメアリの晩年を度々具現化し、メアリ・スチュアートの存在をも示している。

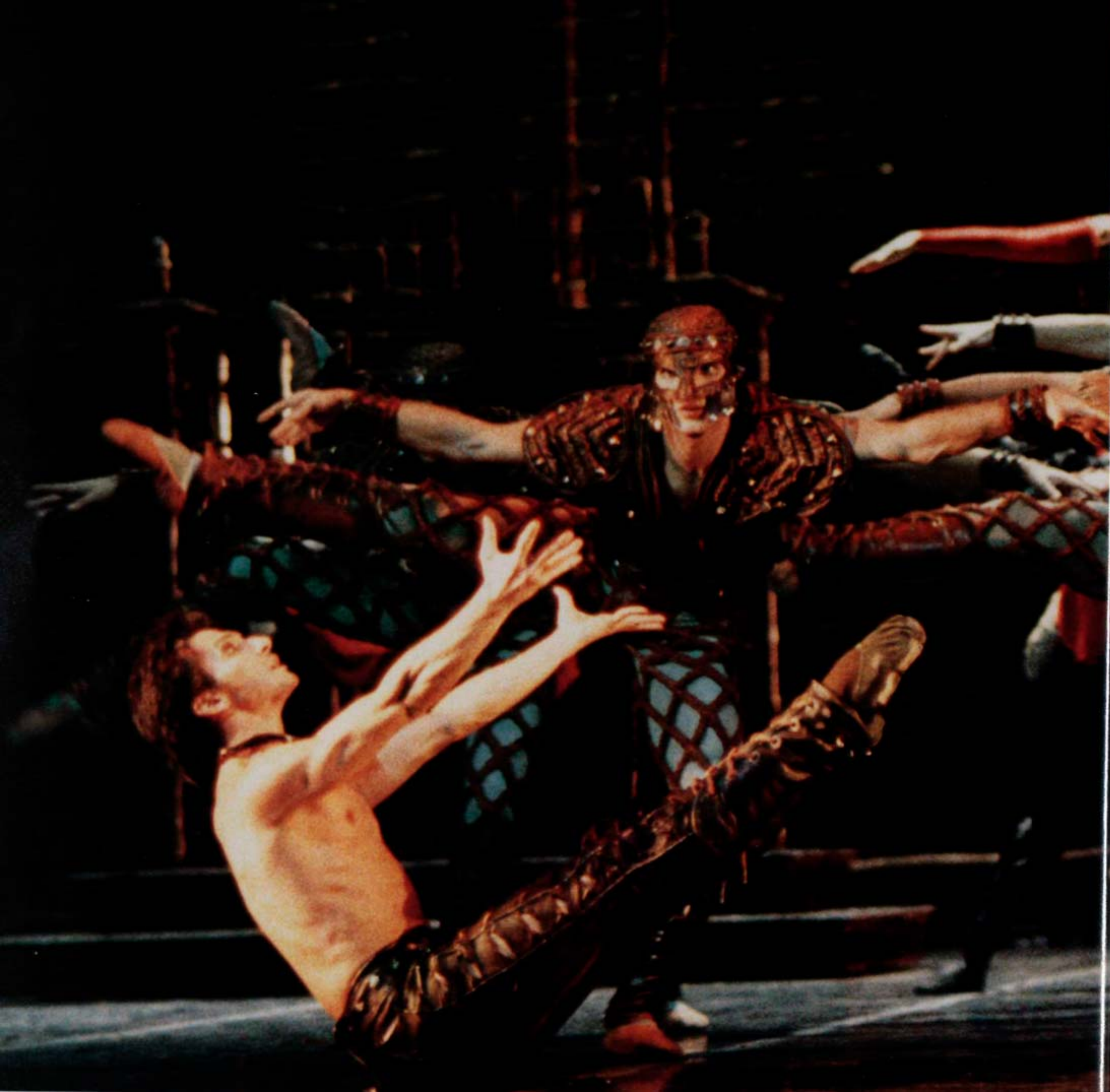
また、イサベル女王は、正に作品中の触媒となり、メアリ・スチュアートの存在の運命性を力強く表現する人物であり、実際グラネロ・バレエの最近の舞台ではメアリもイサベルも主役らしい主役となっている。

振付けの観点からは、その作者のように、メアリ・スチュアートのスタイルや派生のものは、ボレロ様式や現代舞踊とかスペインのクラシックダンスだとかからの数多くの経験と鍛練から生まれている。技術的な観点からは、注目に値するオリ

ジナリティと水準のパ・フィギュール、旋回を行うときの的確なリズム感に裏付けされた振付けを通じて、グラネロは、交互にあらわれる全ての緊張と流れの形を保つことができた。

この舞踊表現の特異性には、質の高い音楽が貢献している。音楽は、エミリオ・ディエゴとマルティン・ルビオによる作曲・演奏であり、筋の夫々の雰囲気を音楽的に表現し、冒頭は当時を彷彿させるメロディーが流れ、メアリ・スチュアートのドラマ性が高まるにつれ、主人公の内面的変化に従い、徐々に表情たっぷりと、また情感あふれたものとなっていく。また、フランシスコ・スアレスは、シェイクスピアの作品からの抜粋を散りばめた、この歌劇の脚本家として貢献し、アルゼンチン人デザイナー、ウーゴ・デ・アナは、古典と現代のミックスを強調した目を目張らせる装飾と衣裳で、振付けに輝きを与え、舞台製作上決定的役割を果たしている。

メアリ・スチュアートはスペイン国立クラシック・バレエ団の壮観な舞台、高い芸術性に裏打ちされ、1988年／1989年シーズンに初めて上演されたものである。







セレナーデ

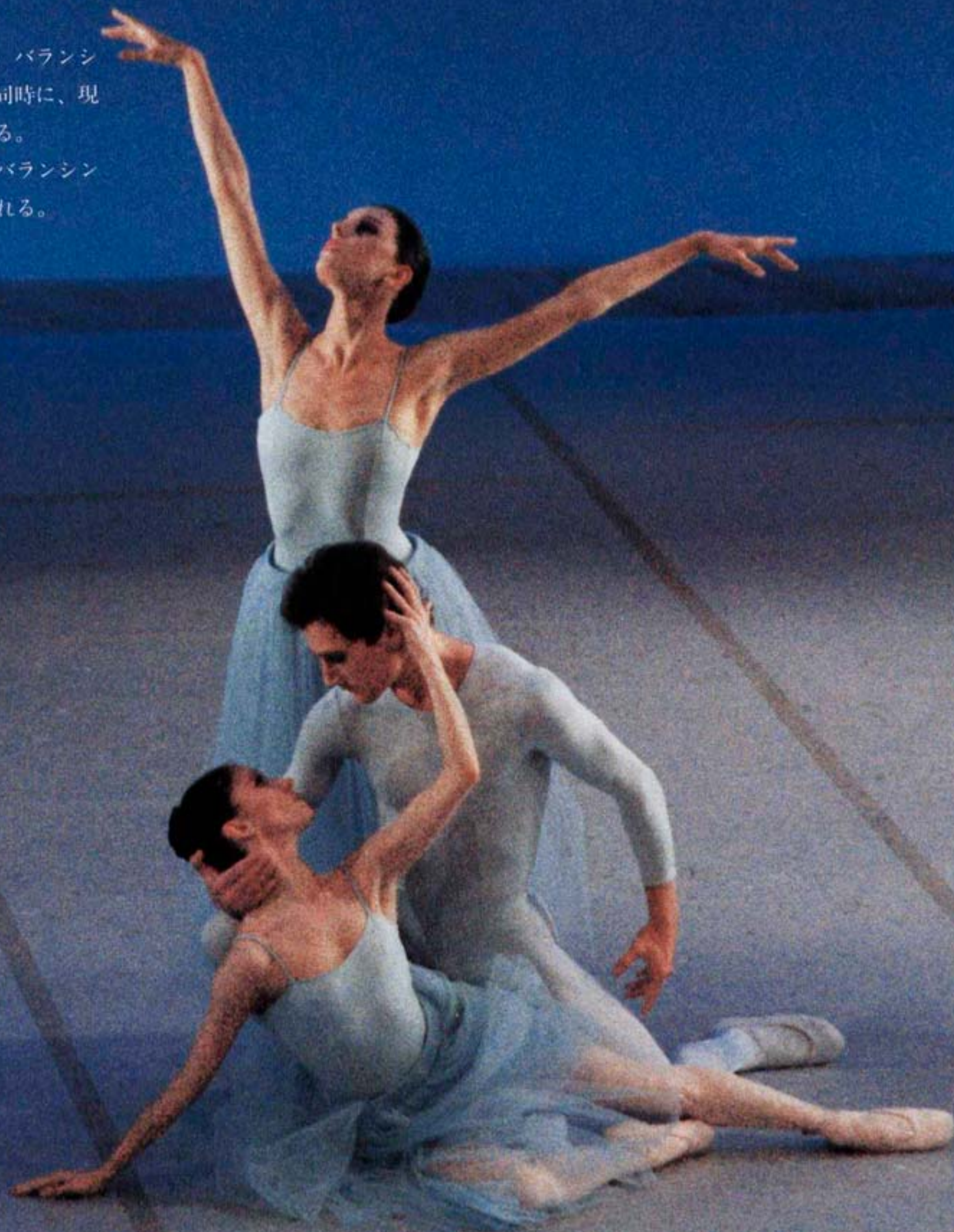
音楽 P・I・チャイコフスキー

振付 ジョージ・バランシン

初演 スクール・オヴ・アメリカン・バレエ、
1934年ハートフォード州

4つの楽章からなる抽象的バレエで、バランシンのアメリカ時代最初の作品であると同時に、現代バレエの傑作としてすでに定評がある。

純粋なロマンティシズムにあふれ、バランシンの新古典主義スタイルがよくうかがわれる。





生命の歌

音楽 グスタフ・マーラー

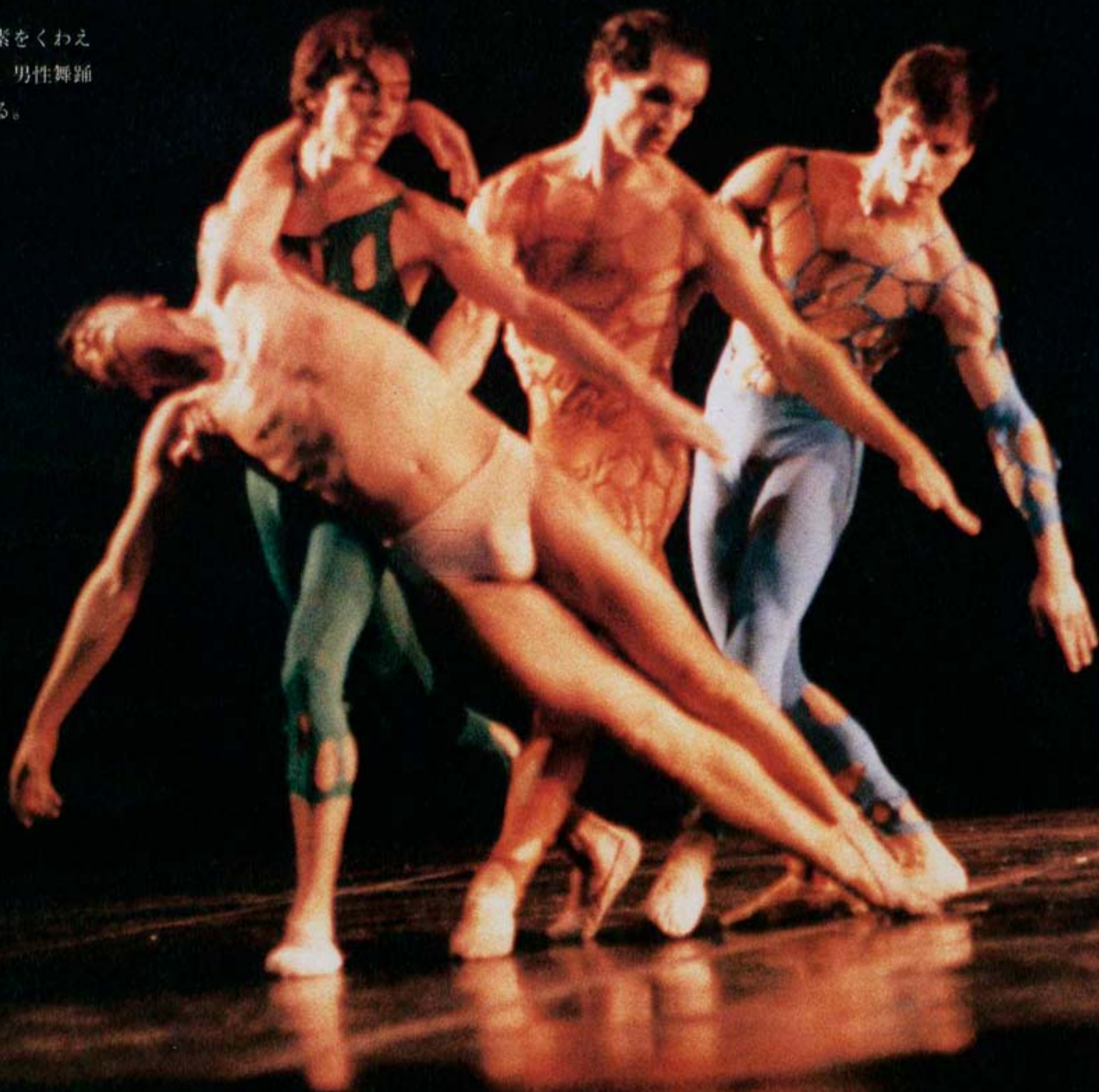
振付 アサリ・プリセツキー

舞台装置 ボリス・メッセレル

初演 キューバ国立バレエ団、1973年、ハバナ

プリセツキーが、キューバ国立バレエ団に在籍していた時期の3つの振付けの最後のもので、4人の男性舞踊手（人間、森、水、空気のシンボル）によって表現される。

クラシック・バレエに現代舞踊の要素をくわえた、ダイナミックなバレエ作品であり、男性舞踊の力強さを最高に発揮したものといえる。



ノクターン

～たった一つの誘惑が永遠の輝きをつくりだした～

音楽 アントン・ドヴォルザーク

振付 ライ・バーラ

初演 スペイン国立クラシック・バレエ、
1986年、マドリード

バーラがこのバレエ団のために作った第2作であり、新古典と叙情主義の間にある彼のスタイルを代表するものと言える。

厳格なバ・ド・ドゥの規則をやぶった“2人のためのバレエ”である。





瀕死の白鳥

音楽：サン＝サーンス

振付：ミハイル・フォーキン

1907年12月、ペテルブルグの貴族会館で催された慈善公演で初演された。振り付けは近代バレエの創始者ミハイル・フォーキン、踊ったのは世紀のバレリーナ、アンナ・パヴロワ。華やかなテクニックを披露する大作のみがバレエと思われていたこの時代に、舞台を滑ってゆくことだけで表現されるこの小品は新鮮な驚きであった。のちにこれはアンナ・パヴロワの代名詞となり、彼女の幅広い公演活動と共に世界に広まった。

1922年、パヴロワの訪日公演の際帝国劇場で踊られ、黒子姿で舞台袖から観察した六代目菊五郎は、白鳥が死んだあと、幕が降りるまで余く息をしないことを発見し、驚いたと記している。しかし、日本での初演は、パヴロワではなく、1916年に来日した、エレナ・スミルノワであった。また初演者についても異論があり、永くロンドンで踊ったリディア・キャシトは、自分が初演者であると主張し、キャシトに嘘をつく理由が見当たらないことから、この説をとる史家もある。

最近では、この小品にモダン・バレエの始祖イサドラ・ダンカンの影響を見る人もいるが、いずれにせよ、これがフォーキン及びパヴロワの代表作であることに変わりはなく、完成された舞踊芸術家にしか踊ることを許されない、極めて高度の作品である。



カルメン組曲

音楽 ジョルジュ・ビゼー（オペラ“カルメン”より）

編曲・ロジオン・シCHEDリン

振付・演出 アルベルト・アロンソ

舞台装置・衣裳 ボリス・メッセレル

初演 ポリショイ劇場バレエ団、1967年

舞台に生きる人間なら誰でも一度は演じてみたい役があるものだが、マヤ・プリセツカヤの場合は、それがカルメンだった。しかもそれはビゼーの音楽につらなるカルメンでなければならなかった。オペラの《カルメン》なら全曲を踊ることもできる、それほどこのオペラは〈舞踊的〉であり、形象が豊かであり、表現に富み、柔軟な造形力をもっている、と彼女はいう。

1966年キューバ国立バレエ団のモスクワ公演でアルベルト・アロンソの作品をはじめて見たプリセツカヤは、この人こそその熱烈な気性と才能をもってすれば、自分のながいあいだの《カルメン》の夢をかなえてくれるのではないかと直感する。一方アロンソはこの偉大な舞姫の創造的意欲に圧倒され、ビゼーの天才的オペラやメリメの小説を踊りに置きかえたり、翻訳したりするのではなく、この情熱的音楽をかりて、世界の音楽と文学の古典のなかの、もっとも偉大な形象のひとつであるカルメンを通して、バレエ全体を処理しようと決心する。やがて彼がもたらした台本をもとにして、プリセツカヤの夫君であり、現代ソビエト作曲界のホープであるロジオン・シCHEDリンの仕事が始まる。彼は台本作者、主演者とともに《カルメン》がビゼーの音楽を抜きにしては考えられないという前提に立って、これがバレエ音楽へのトランスクリプションを試みる。それがどんなに輝かしい成功をおさめたかは、あらためて言うまでもない。

振付演出のアルベルト・アロンソはキューバ・国立バレエ団の指揮者フェルナンド・アロンソの弟であり、同バレエ団のプリマバレリーナ、アリーシア・アロンソの義弟にあたる。アロンソによれば「カルメンは生活のなかのすべてのものを摂取しようとする。もし生の条件が死との勝負であるとするならば、彼女はそれをも受け入れようとする。それゆえにカルメンの生活は自由を侵すあらゆる人びととの日々の戦いの場であるように思われる。牛に戦いをいどむ闘牛士と同じことである。カルメンの運命は、闘牛士と牛の運命のように、つねに生と死の境にある。したがって凝人化された運命の形象が、このバレエに現われることは、偶然ではない」と。

舞台美術のボリス・メッセレルはアサフ・メッセレルの長男。ポリショイ劇場における初演は1967年4月であった。

《カルメン組曲》は現代バレエの傑作として、その評価が国外にも伝わったため、間もなくバレエ映画が制作され、プリセツカヤを中心とする非凡なアンサンブルの芸術は、各国のバレエ愛好者を魅了し、堪能させていることはご存じの通りである。



《カルメン組曲》は4景から成る。

第1景 幕があくと牛の頭を描いたカーテン、前奏とともにそれがあがる。舞台は闘牛場ふうの半円形の見物席に男女が坐り、平舞台で踊るカルメンを侮蔑と嫌悪のまなこで見つめている。カルメンが去り、隊長ツニガが現われると、男たちは見物席から飛び降り、輪をつくって踊り、やがて女たちと退場する。

ホセ登場、ツニガとの踊りがはじまる。命令するものと任務を遂行するもの、権力への絶対服従を描く場面である。

ツニガはここですべての秩序が保たれるよう、警備を命じて出てゆく。かわってカルメン登場。ホセはたちまちカルメンの美貌と情熱のとりこになる。ハバネラを踊って去るカルメンのあとを追ってホセも退場する。

このときそれまでのぞき見していた女たちが踊りだし、ホセを呼び戻し、彼を詰問する。連れ戻されたカルメンは朋輩を口汚く罵り、みんなにあたりちらす。ツニガはカルメンに、もし彼女が世間並みの身持ちのいい娘でありたいなら、と訓戒をほどこすが、カルメンはてんでうけつけない。隊長はやむなく彼女を投獄するよう、ホセに命令する。

ツニガが去り、男たち女たちも行ってしまうと、カルメンは媚態のかぎりをつくしてホセの心を奪い、彼はもはや彼女を投獄することができなくなり、釈放してしまう。

第2景 平舞台の椅子に居並ぶ男女の手拍子とサパテアードでフラメンコが踊られる。

闘牛士エスカミリオが登場、この前の日曜の闘牛の模様を話しているところに、奥からカルメンが現われ、彼の姿に見とれてしまう。闘牛士はいつも死と直面している、男のなかの男だ。カルメンがどうしてエスカミリオの男らしさに、心をひかれずにいられよう。

2人の踊りが終りに近づいたとき、みんなが立去る。烈しい性格をもつ2人が、真正面からぶつかり、おたがいにゆずらない。このときうしろの台の上から彼らを見ていたツニガは、監獄にいるはずのカルメンがどうしてこの場にいるのか、いったいホセはどこへ行ったのか、と怒りがこみあげてくる。

ホセが姿を現わしたので、ツニガは台から飛び降り、カルメンをまんなかの3人の男がからむ踊りのあと、カルメンとエスカミリオが立去ろうとするとき、ホセは隊長にむかってカルメンを愛していることを告げ、エスカミリオとのあいだに小競合いをおこす。エスカミリオの去ったあと隊長は〈気をつけろ、お前もいつかはやられるぞ〉という捨てぜりふを残して退場。カルメンとホセの愛のパ・ド・ドウの終りに運命の牛の垂幕がさがる。

第3景 舞台前方に上手からエスカミリオ、運命（女）、ツニガ、ホセの4人が観客に背をむけて椅子にかけ、奥の方でトランプ占いをしているカルメンを見つめている。カルメンは自分がホセ

に殺されることを予見する。

しかしカルメンはホセを見ると、わたしは何物にも束縛されない、自由なのだから、自分の思い通りに行動するほかないと宣言する。

第4景 闘牛場。

エスカミリオと牛の死闘。そこへカルメンとホセ登場。カルメンはエスカミリオを、ホセはカルメンを凝視する緊張の一瞬。ホセとカルメン、エスカミリオと牛の2組の争いが入り乱れ、エスカミリオが牛を刺した瞬間、カルメンはホセに刺される。彼女はホセにむかって〈わたしは死んでゆく、すべては終わった〉といい、愛撫するかのように彼の肩に手をかける。自由に、奔放に生きぬいた女の思いとともに、美しいポーズが崩れ落ちる。

(野崎詔夫)



マイヤ・プリセツカヤは語る



マイヤ・プリセツカヤは、62歳になっても相変わらず現役の第一線で踊っています。彼女は、「人々を感動させられる力と可能性があるうちは、私は踊り続けるでしょう」と語っています。

昨年11月19日、マドリッドで「メアリ・スチュアート」が初演され、大成功をおさめました、それをもってこの4月にスペイン国立クラシックバレエを率いて来日します。

この作品は、彼女のために特別に振り付けられたものです。

「私は、いつも新しい作品を踊るのはたいへんうれしい」とその意欲のほどをのぞかせています。

つぎのインタビューは、昨年11月14日発行の「TRIBUNA」誌上で発表されたもので、聞き手はベレン・ゴベギ氏です。

※

「最初のころ、私がクラシック・バレエを習いはじめたときから、私はいつも違った役を、前の役とは似ていない役を欲しがりました。プリセツカヤの人格は、劇場で演技している性格と同様に、いつも変化しています。世界に、前にも後にも同じものなど決してありません。だから、私が以前とまったく変わっているのは自然なことです」

「子供のころから、私はスペイン舞踊が大好きでした。ですから、本当のスペインを扱ったものではないとはいえ“ドン・キホーテ”を上演したときは、とても熱がこもりました。また私が“カルメン”で最高の成功を得たのも、私がスペイン好きだからだと思います。“カルメン”はスペインをテーマにした、反古典主義の振り付けでした。このミックスはとても魅惑的です。この作品を取り上げた当時、私は一生同じことをやってはいられないのだと自覚していました。30年以上も“白鳥の湖”を踊ってきて、何か本当に新しいものを必要としていたのです。



“カルメン”があんなにうまくいったのは不思議で、今でも私には説明が出来ません。というのは、ポリショイのアカデミズムというのは相当に冷酷なものだからです。」

「いつも私は、私の役を私のやり方で踊ってきました。それは許されないことでした。ポリショイや文化省は、私をあざけていました。なんだあの踊りは！ 足を頭の上までもあげて！ まったく間違っている！……でも、今では若い踊り手たちは私を真似しています。私の間違いまで真似ます。私よりずっと高く足をあげます。まるで体操です。」

私はいつも規則を破ってきました。それも許されないことです。それなのに、観客はいつも私に喝采します。なおさら私は許されません。」

「私はヨーロッパやアメリカで、世界最高の振付家たちと仕事することも出来たでしょう。私のために特別にバレエをつくってもらって踊れたでしょう。私はいつも映画に興味がありました。外国に行けば、たくさん映画を作ることが出来たでしょう。大金持ちになっていたかも知れません。」

でも私は、ポリショイの舞台を初めて踏んだときから、決してここを離れまいと決心していました。私が外国へ出なかったのは、愛国心からではありません。ポリショイを情熱こめて愛しているからです。

ポリショイの舞台は完璧です。大きすぎず、小さすぎず、理想的な傾斜を持っています。たとえばロサンジェルスやブエノスアイレスの劇場の舞台はとてもすばらしい。大きさもぴったりです。でも、何かが欠けている。私にはそれが何なのかわかりませんが……。

ですから、モスクワへ帰って、ポリショイの入りの口の8本の柱を見るたびに、いつも私の鼓動はとまってしまうのです。」

「スペイン文化省との3年間契約で、私はスペイン国立クラシックバレエの芸術監督を勤めています。今は半年はロシアに、半年はスペインにいるという感じです。マドリッドでは、ブロード美術館の前にあるホテル・パラスに住んでいます。美術館にも、暇があればよく行きます。私の好きなのはベラスケス。ベラスケスのすべてが好きです。」

マドリッドでの暮らしは、毎朝サルスエラ劇場へ行ってレッスン、それから毎日違った作品のリハーサル。家に帰ってテレビを見るか読書。夜遊びは出来ませんね。私はちゃんと睡眠を取らないと働けないので……」

「カルメンほどではないのですが、私が今ずっと夢見てきた女性はいアリ・スチュアートです。私はいつも自問してきました——どうして400年もの間、みんなはいアリ・スチュアートのことを断頭台にあがったことでしか記憶していないのだろうか？

私は初めはいアリ・スチュアートで映画を作るつもりでした。いろいろな人にその話をしましたが、そのうちの一人がアルゼンチン人でスペインにいるホセ・グラネロです。彼の“メディア”はモスクワで大好評でした。私は、彼もまた他の人と同じように、私の話なんか忘れてしまうだろうと思っていました。

ところが2ヵ月後にスペインへ来たら、グラネロは台本を完成させていました。彼は私を本当に理解してくれたのです。でも、彼の台本は映画ではなくバレエのためのものでした。まずバレエを創ろう、そうすれば映画化の道も開けるだろうというのです。」

「“いアリ・スチュアート”はいアリ・スチュアートの物語でもあり、そうでもない。私もまたいアリ・スチュアートのように、敵を助けるという間

違いを犯してきました。一生戦ってきました。私はまだ首を切られてはいませんが、そうしたがっている人はいます。」

「メアリ・スチュアートは、教養ある女性で、演劇や音楽を愛し、数か国語を話し、外国の文学を読んでいました。彼女はさまざまの悲劇に遭いましたが、全部自分が悪かったのです。フランスへなんか行ってはいけなかったのに、自ら蛇の口へ入っていった。彼女は投獄されている17年間に手紙を書いて、小さな箱にしまっていました。それは誰に宛てたものでもなかったといいます。私の説では、それは手紙ではなくて文学作品——小説——だったのですよ。私にはそのことを証明することは出来ません。私は歴史学者ではなく踊り手です。でも、私にも、ものを考え、ばかなことをいう権利はあるわ。私の説に反対でも、議論しないでくださいね。」

「私はバレエ・マスターにはなりたくありません。私は踊り手です。私が教えるのは、自分の踊り方を見せるということだけです。スペイン国立クラシック・バレエの、たとえばアランチャ・アルグエリェスはすばらしい。彼女は私をよく見ていますが、私の真似をしません。個性をもっています。彼女の“カルメン”はすばらしい。ソ連の踊り手は私の真似ばかりしていますよ。」

「アーティストのなかには“私は自分のために踊っている”という人がいますね。私は自分のために踊ったことはありません。いつでも私は観客のために踊っています。だから拍手がなくなったら、そのとき私は引退するでしょう。」



メアリ・スチュアートの稽古



母とともに



ソ連国立モスクワ・クラシック・バレエ

'88ロンドン公演の新版「白鳥の湖」は大成功。待望の初来日。ボリショイバレエの名プリマ、マクシモアとアナニアシビリも特別参加の予定。

1966年に結成の若々しいバレエ団。現在、芸術監督はカサトキーナとワシリョーフ。国際バレエ・コンクールの入賞者11名を擁する豪華な陣容。

[主なソリスト]

イサエフ・スタニスラフ(バルナ1位)
アレクサンドル・ゴルバチュービッチ(バルナ1位)
イーグル・テレニテフ(パリ1位)
ウラジミール・マラホフ(バルナ グランプリ)
イルギス・ガリムーリン(バルナ1位)
タチアナ・バリー(バルナ1位)
ベラ・チマショーワ/ニーナ・アシュビアン/
ガリーナ・シュレーピナ

「白鳥の湖」

チャイコフスキー作曲

「ロメオとジュリエット」

プロコフィエフ作曲

9月28日[木] 浦和市文化センター
29日[金] 愛知厚生年金会館
10月 2日[月] 東京文化会館
3日[火] 東京文化会館
4日[水] 東京文化会館
5日[木] 東京文化会館
8日[日] 市川市文化会館
9日[月] 宮城県民会館
10日[火] 新潟県民会館
11日[水] 新潟県民会館
12日[木] 八王子市民会館
14日[土] 沼津市民文化センター
19日[木] 愛媛県民文化会館
22日[日] 大阪フェスティバルホール
23日[月] 大阪フェスティバルホール
26日[木] 神奈川県民ホール



ソ連を代表するピアノの巨人

ラザール・ベルマン

●来日期間 5月～6月

若き俊英バイオリニスト、
父との共演で初来日

パーベル&ラザール 父子コンサート●来日期間 5月

1988年1月、10年ぶりに来日したピアノの巨人ラザール・ベルマンの子息パーベルが父とともに来日、父子ジョイント・コンサートで日本デビューします。

パーベルは1987年第34回バガニーニ国際バイオリン・コンクールで2位に輝き、音楽家としてのスタートを切りました。弱冠18歳の新進バイオリニスト・パーベルと、父ラザールとのジョイントは、広く音楽ファンの注目を浴びています。



円熟したピアノの冴えが輝きをまして

タチアナ・シェバノワ●来日期間 11月



室内楽の国チェコの至宝

スメタナ・トリオ

●来日期間 10月

ピアノ: ラドスラフ・クヴァピル

バイオリン: パーツラフ・スニーチル

チェロ: スタニスラフ・アポーリン

驚異のア・カペラ、グルジア奇蹟のポリフォニー

ソ連国立グルジア
民族アンサンブル

ルスタビ

紀元数世紀の寺院が
今も残るグルジア。
力強い男声コーラスと
しなやかな女性の舞踊、
数々の民族楽器がかなでる
グルジアのエスニック・サウンド!!

●来日期间 9月～10月



劇場はスタンディング・オベーションの歓声につつまれています。



観客のイマジネーションを炎のようなドラマに誘った舞台が、いま静かに幕を下ろしていきます。一瞬、息を呑むような沈黙の後に、突如として湧き起こる拍手と歓声。花々に彩られた穏やかな森の風景、鳥たちが交す小さな啼き声、荒涼とした砂の地平線……舞台の感動をより深めてくれた、緻密で、美しい舞台表現の数々がカーテンコールの間にも、鮮やかによみがえってきます。舞台芸術の可能性を追求する最新の技術、そして舞台を愛する情熱が創り出した世界に、暖かく、熱狂的な拍手はいつまでも鳴り止みません。この絶えることのない歓声を大きな糧としながら、より素晴らしい舞台創造へ向かって、新しい挑戦が続けられていきます。

最先端の技術を誇るSTAGE LIGHTING SYSTEM

MARUMO ELECTRIC CO., LTD.

Ⓜ 丸茂電機株式会社

〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03-252-0321 営業所／大阪・名古屋・福岡・広島・札幌・仙台

劇場設計の豊富なノウハウを提供する

J. S. C.

株式会社ジャパン ステージ コンサルタント

〒104 東京都中央区銀座2-14-5三光ビル ☎03-546-0051

とにかく、とっても、Tカード。

大きな夢、小さな夢。
遠い夢、近い夢。
あなたの暮らしを支えている
エネルギーは夢です。
その夢にパワーとスピードを
与えるのがTカード。
ショッピングの
強い味方になります。

いいこと、いろいろ、Tカード。

Tカード新会員募集中

- 東武百貨店、東武ストアでクレジットショッピング
- 全国約1,200ヵ所の提携施設でご優待
- 不意の出費には、便利なキャッシング



お申込みは18才から。東武クレジットのカウンターで
お申込みください。

池袋店：03 (980)1205
船橋店：0474(25)1280
宇都宮店：0286(33)3101
日比谷シティ店：03 (501)6065
下赤塚店：03 (979)4111
鶴瀬駅ビル店：0492(53)1100
川越メイン店：0492(25)6633
おけがわメイン店：048(786)9181

株式会社 東武クレジット

〒171 東京都豊島区西池袋1丁目29番5号
山の手ビル 電話03(980)1200代表

もっと自由に、もっと自在に
イトーキが拓く
New Office Age
お慶びで100周年



熟練した職人たちが
丹念に仕上げた高級木製家具。
国際化が著しい経済界、第一線のビジ
ネスマンの朝が早くなってきました。オフィ
スのダイニングルームは充実していますか。
イトーキのデューロンはデンマークの家具
職人の手作業によって生み出される最高
級の木製家具。丸みを生かした優美な
シルエットが、エグゼクティブの朝を知的
に演出します。

dyrlund

株式会社イトーキ

東京都中央区銀座1-8-19 〒104 電話03-566-5211お客様係(ダイヤルイン)

エグゼクティブは
朝を大切にします。
ダイニングルームに
イトーキヘデューロン。

自動販売機のことなら、何でもご相談下さい



弊社は自動販売機のトップメーカー富士電機の直系関係会社として設立された、自動販売機のゼネラルオペレーターでございます。

株式会社 パシフィックベンディング東京

本社営業所	東京都品川区東五反田3-2-8 第二西山ビル	TEL 03(445)4741(代)
城南営業所	東京都品川区東五反田3-2-8 第二西山ビル	TEL 03(445)4741
城西営業所	東京都練馬区土支田1-31-11	TEL 03(5997)3882
城東営業所	東京都江戸川区南葛西3-20-8	TEL 03(688)8591
横浜営業所	神奈川県大和市柳橋2-14-1	TEL 0462(67)1724
宇都宮営業所	栃木県鹿沼市白桑田516-6	TEL 0289(64)7295
仙台営業所	宮城県仙台市日の出町3-5-18	TEL 0222(84)2623
沼津営業所	静岡県沼津市大岡1816-26	TEL 0559(23)6202

合同酒精



すべからく女性はフルーツです。

ステキな女性に、新しいフルーツをお届けいたします。
アップル、オレンジ、ピーチ、そしてストロベリー。
4つのテイストが競演するキャンソンスイートフルーツワイン。
大人っぽさのなかにも、可愛らしさが、光る装いで。
あなたにもきっと、甘い関係が訪れるはず……。

アップル
オレンジ
ストロベリー
ピーチ



スイート・フルーツ・ワイン CANON

750ml/1,000円・250ml/350円 価格は消費税を含む標準小売価格です。



JTB INTERNATIONAL SERVICES.

- Overall Coordination of Company Organized Tours(Incentive Tours for Foreign Associates)
- Total Management of International Conferences and Events.
- Sunrise Tours for groups and individuals. Tours feature Japan's major tourist locations.
- VIP Service
JTB's most experienced guides 34 provide tour services for sight seeing in Osaka, Kyoto, Nara and Kobe; transportation by hired car.



JAPAN TRAVEL BUREAU

OSAKA OFFICE

8F HIGOBASHI-SHIMIZU BLDG.3-7, 1-CHOME, TOSABORI, NISHI-KU, OSAKA 550 JAPAN
TEL:06-449-1071 FAX:06-449-1074 TELEX:5233461 FTDOSA

舞台機構設備 設計製作施工

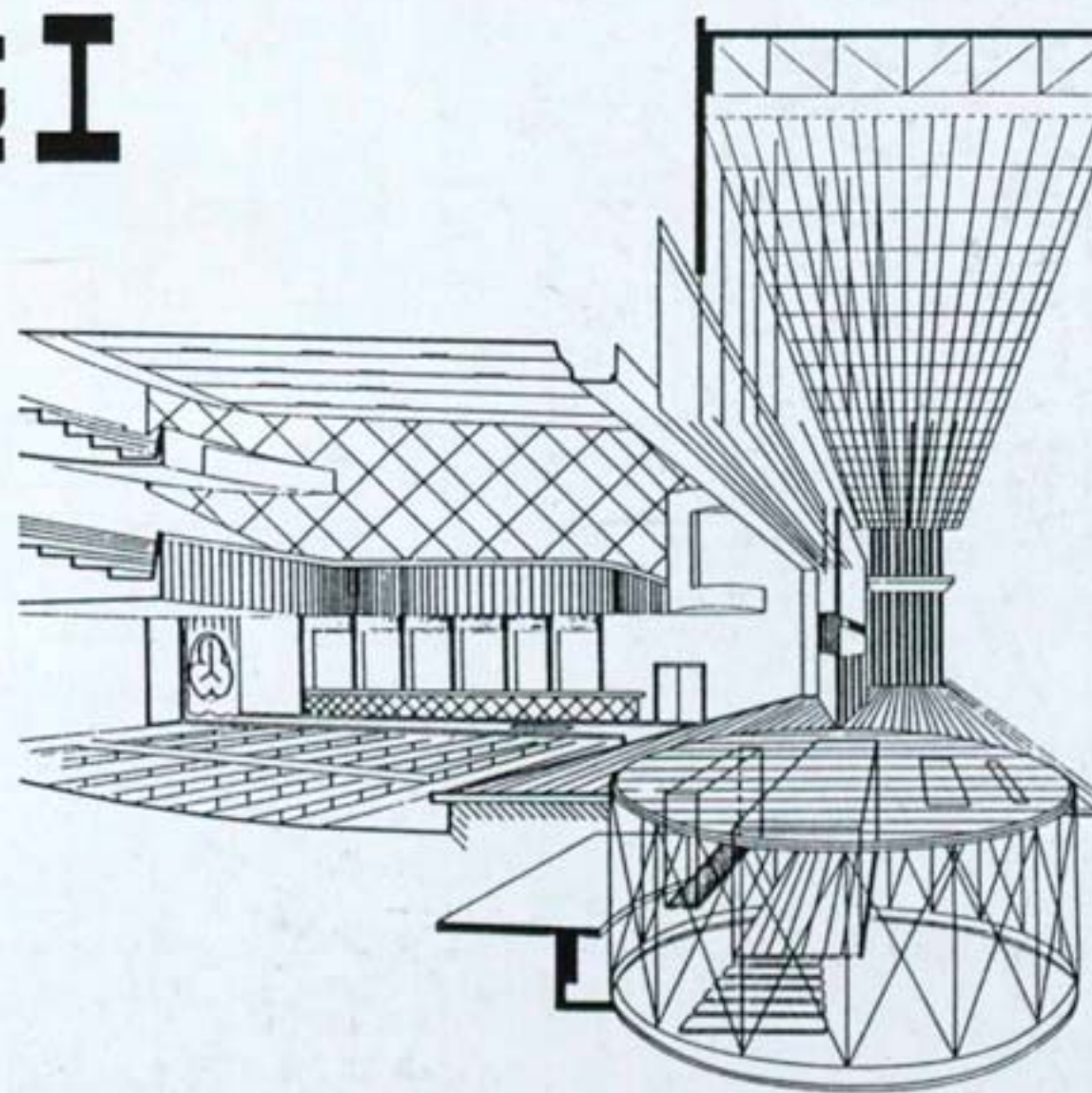
劇場・公会堂・テレビスタジオ
舞台吊物昇降装置・廻り舞台
迫り上げ装置・定式物・照明
設備幕類・舞台用金物
設計・施工



モリヘイ

森平舞台機構株式会社

本社 〒111 東京都台東区花川戸2-11-2 TEL (03)842-1621(代表)
出張所 名古屋・大阪・北海道
工場 埼玉県川口市



祝 東京労音35周年

労音十条会館竣工

設計管理

株式会社 **象地域設計**

☎03-601-6841

構造●株式会社増田建築構造事務所

☎03-951-5211

設備●株式会社 翔 設 計

☎03-205-0086

音響●株式会社永田穂建築音響設計事務所

☎03-351-2151

施 工

 株式
会社 **片山組**

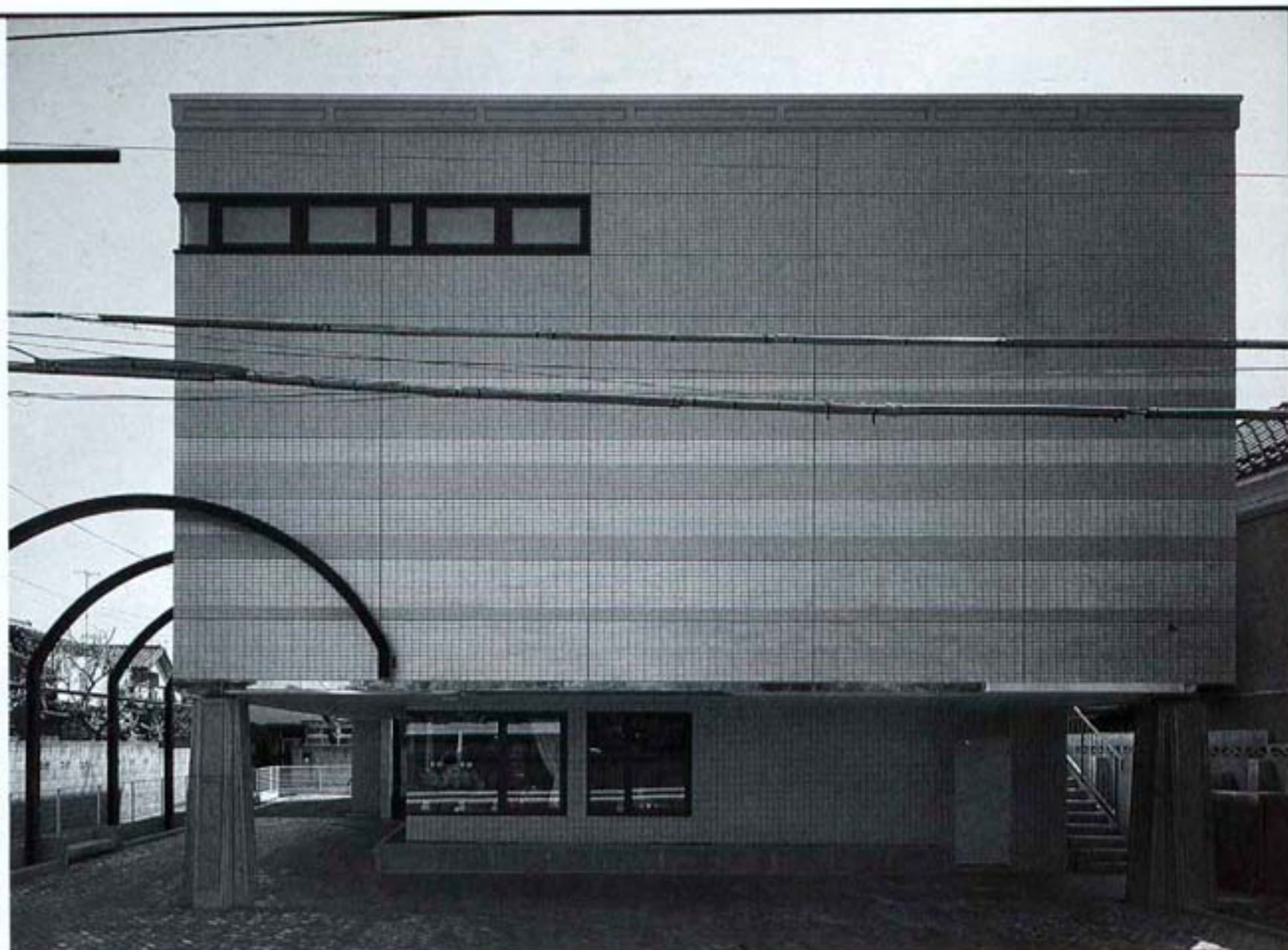
新宿区新宿6-22-13 ☎03-352-0611

支店／札幌・大阪・福岡 山張所／福島、埼玉、千葉

協力業者●山工電気工業株式会社 ☎03-209-4141

株式会社 菱 冷 社 ☎03-767-8138

技研興業株式会社 ☎03-464-4391



1989年日本公演プログラム
企画制作・発行＝東京労音©1989
レイアウト・フニッシュ＝ユニクリエイティブ
印刷＝久栄興産株式会社



MINISTERIO DE CULTURA

instituto Nacional de las Artes Escénicas y de la Música